

仙台市文化財調査報告書第81集

南 小 泉 遺 跡

— 第13次発掘調査報告書 —

昭和60年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第81集
「南小泉遺跡」正誤表

| ページ | 行 目 | 誤 | 正 |
|-----|------|---------------------|---------------------|
| 1 | 16 | 庄 司 信 広 | 庄 子 信 広 |
| 6 | 第1表 | 第9次：掘立柱建物跡 (棟) | :掘立柱建物跡(2棟) |
| 16 | 観察表 | 写真図版 15-3 | 写真図版 15-5 |
| 17 | " | 写真図版 15-4 | 写真図版 15-2 |
| " | " | " 15-5 | " 15-4 |
| " | " | " 15-2 | " 15-3 |
| " | " | " 16-6 | " 16-7 |
| " | " | " 16-7 | " 16-8 |
| 18 | 最下行 | 1.8 m以下 | 1.8 m以上 |
| 21 | 11 | 灰黄褐色土 | 灰黄褐色粘土 |
| 22 | 観察表 | 写真図版 16-8 | 写真図版 16-9 |
| " | " | " 16-9 | " 16-10 |
| " | " | " 16-10 | " 16-6 |
| 23 | 4 | 綾 線 | 稜 線 |
| 24 | 7 | 綾 線 | 稜 線 |
| 27 | 10 | 綾 線 | 稜 線 |
| 37 | 図版16 | 8, N-1 鉄鏝 第9 図-7 | 8, N-1 鉄鏝 第9 図-8 |

仙台市文化財調査報告書第81集

南 小 泉 遺 跡

—第13次発掘調査報告書—

昭和60年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

南小泉といえば、著名な劇作家である真山青果の作品、「南小泉村」の舞台となった所として世に広く知られています。一方、南小泉一帯は遠見塚古墳で代表されるように、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代、さらには中近世まで、先人の営んできた生活の証しが包蔵され、とりわけ東北南半地方における古墳時代の標識遺跡（南小泉式期）としては、全国的にも著名であり、本市内最大の規模を誇る遺跡でもあります。

こうした歴史遺産は、現在その数400ヶ所を越えるものとされており、超近代化された現代の中で、あたかも未解なものはないかのごとくの内に生活しているわたくしたちに、まだまだ解らないことが多いということを知らせるものであります。歴史遺産としてのこうした遺跡や遺物が、無限の事柄を現代に語りかけてくれることを思う時、これを謙虚に学び、後世に継承していかなければならないことが、わたくしたちに課せられた責務と考えるものであります。

ここに報告する調査成果は、こうした意味でひとつの重要な資料として公開するものであります。本書を通じて、文化財に対する啓発の一端を認識していただけるならば、この上ない喜びと存じます。

今後とも、文化財行政に対する御教示、御助言を願って序といたします。

昭和 60 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例 言

1. 本報告書は、東北エンジニア・サイエンス株式会社本社建設に伴う、宮城県仙台市所在の南小泉遺跡内における発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は渡辺 誠が担当し、整理・実測等は次のように分担した。
遺物実測：及川 格、松本清一、神成浩志、斎 和恵、鈴木勝彦、高橋綾子、鈴木和子
遺構・遺物トレース：渡辺 誠 遺物復元：斎 和恵、鈴木和子
遺物写真：木村浩二、渡辺 誠、松本清一
3. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25000「仙台」を使用している。
4. 石製品の材質の同定は、仙台市科学館・佐々木 隆氏、植物遺体の鑑定は、東北大学農学部・星川清親氏にお願いした。
5. 実測図中の方位は磁北に統一しているが、これは真北に対し西偏7°0′である。
6. 遺物の分類略号は次の通りとした。
C：土師器(非ロクロ) K：石器・石製品 N：金属製品
7. 本書の土色は、「新版標準土色帳」(小山・竹原：1973)に基づいている。
8. 調査による、各種実測図・写真及び出土遺物は仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

本 文 目 次

| | |
|------------------|----|
| I. 調査要項 | 1 |
| II. 調査に至る経過 | 1 |
| III. 遺跡の位置と環境 | 2 |
| 1. 遺跡の位置 | 2 |
| 2. 地理的環境 | 2 |
| 3. 歴史的環境 | 2 |
| IV. 調査の方法 | 4 |
| V. 基本層位 | 4 |
| VI. 発見遺構と出土遺物 | 7 |
| 1. 2a層上面検出の遺構と遺物 | 7 |
| (1) 1号溝跡 | 7 |
| (2) 2号溝跡 | 7 |
| 2. 4a層上面検出の遺構と遺物 | 11 |
| (1) 1号住居跡 | 11 |
| (2) 2号住居跡 | 15 |
| (3) 3号住居跡 | 18 |

| | |
|-------------------------------------|--------------------|
| (4) 3号溝跡……………21 | (5) 遺構外出土遺物……………23 |
| Ⅶ. 考察とまとめ……………23 | |
| 付章：南小泉遺跡3号溝跡(1c層)出土植物遺体鑑定……………星川 清親 | |

挿 図 目 次

| | |
|----------------------------|------------------------------|
| 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡……………3 | 第8・9図 1号住居跡出土遺物実測図…16・17 |
| 第2図 南小泉遺跡年度別発掘調査区位置図……………5 | 第10図 2号住居跡平面図・断面図……………19 |
| 第3図 遺構配置図……………8 | 第11図 3号住居跡平面図・断面図……………20 |
| 第4図 調査区北壁・西壁断面図……………9 | 第12図 3号溝跡平面図・断面図……………21 |
| 第5図 1・2号溝跡平面図・断面図……………10 | 第13図 3号溝跡出土遺物実測図……………22 |
| 第6図 1号住居跡平面図・遺物出土状況……………12 | 第14図 A-2区4a層上面出土土坏実測図……………23 |
| 第7図 1号住居跡断面図……………13 | 第15図 1号住居跡出土土師器……………24 |

表 目 次

| | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 第1表 南小泉遺跡発掘調査・年度別調査成果一覧表……………6 | 第3表 2号住居跡出土遺物集計表……………18 |
| 第2表 1号住居跡出土遺物集計表……………15 | 第4表 3号住居跡出土遺物集計表……………21 |
| | 第5表 3号溝跡出土遺物集計表……………22 |

図 版 目 次

| | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 図版1 調査区遠景……………31 | 図版9 3号住居跡全景……………33 |
| 図版2 1・2号溝跡全景……………31 | 図版10 3号溝跡断面……………34 |
| 図版3 1号住居跡全景遺物出土状況……………31 | 図版11 3号溝跡植物遺体出土状況……………34 |
| 図版4 1号住居跡カマド断面……………32 | 図版12 3号溝跡全景……………34 |
| 図版5 1号住居跡P5断面……………32 | 図版13 A-2区4a層上面土坏出土状況……………35 |
| 図版6 1号住居跡P4遺物出土状況……………32 | 図版14 調査区完掘状況……………35 |
| 図版7 1号住居跡完掘状況……………33 | 図版15 1号住居跡出土遺物……………36 |
| 図版8 2号住居跡カマド断面……………33 | 図版16 1号住居跡出土遺物他……………37 |

I. 調査要項

遺跡名称：南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号C-102）

所在地：仙台市南小泉字村東87-2

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

社会教育課課長 阿部 達

社会教育課主幹 早坂春一

文化財調査係長 佐藤 隆

試掘調査 文化財調査係長 佐藤 隆

本調査 文化財調査係 教諭 渡辺 誠、主事 木村浩二・金森安孝

調査協力：東北エンジニア・サイエンス株式会社、千葉建設株式会社

調査期間：試掘調査 昭和59年7月25日

本調査 昭和59年9月10日～10月3日

室内整理 昭和59年10月15日～昭和60年1月20日

調査対象面積：約40㎡ 調査面積：約30㎡

調査参加者：丹野正作、松林四郎、本郷孝治、吉野たまこ、庄司信広、富地晃裕

II. 調査に至る経過

仙台市の東部に位置する南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号C-102）周辺は、昭和43年に仙台バイパスが開通して以来開発による宅地化が進み、農地としての田畑はしだいに減少しつつある地域である。

昭和59年5月28日、仙台市若林一丁目2番41号東北エンジニア・サイエンス代表取締役、畠山 誠氏より、南小泉遺跡の発掘届が仙台市教育委員会に提出された。その内容は、仙台市南小泉字村東87-2地内に事務所を建設するというものであった。申請地が南小泉遺跡内に位置しており、文化財調査係は申請者に対し設計変更を要請し埋蔵文化財の保護に努めた。協議の結果は、事務所に併設される浄化槽部分だけは盛土内に設置できないというものであった。

以上の経緯から、仙台市教育委員会では浄化槽部分によって破壊される箇所について試掘調査の後、記録保存を目的とした発掘調査を実施するという事で申請者の了解を得、昭和59年9月10日から本調査を実施した。

Ⅲ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置

南小泉遺跡は仙台平野の北部、仙台市遠見塚一丁目・二丁目、南小泉二丁目、古城三丁目、南小泉字伊藤屋敷・字遠見塚西・字村東・字霞ノ目に所在し、東西約1.5km、南北約0.9km、面積約1,250,000㎡の仙台市内では最大規模の遺跡である。

今回の調査地点は、この南小泉遺跡の南部、国道4号線仙台バイパスのすぐ東側にあり、仙台市南小泉字村東87-2に所在する。この地点は仙台市役所の南東約5.9km、国鉄仙台駅の南東約4.9km、国鉄長町駅の東北東約2.8kmの位置である(第1図)。

2．地理的環境

仙台平野の地形は東と西で大きく二分される。西部は奥羽山脈から連なる七北田・青葉山・高館丘陵と、名取川・広瀬川が中流域に形成した段丘地形とから成る。東部には幅約10kmの沖積平野「宮城野海岸平野」(註1)が、海岸沿いに広がっている。この沖積平野は、深沼層・霞ノ目層・福田町層・岩切層の4層から形成されており、本遺跡はこの霞ノ目層にあたっている。霞ノ目層は層厚1～5mほどの現世に続く氾濫原で、内陸部の最上部を占めている(註2)。

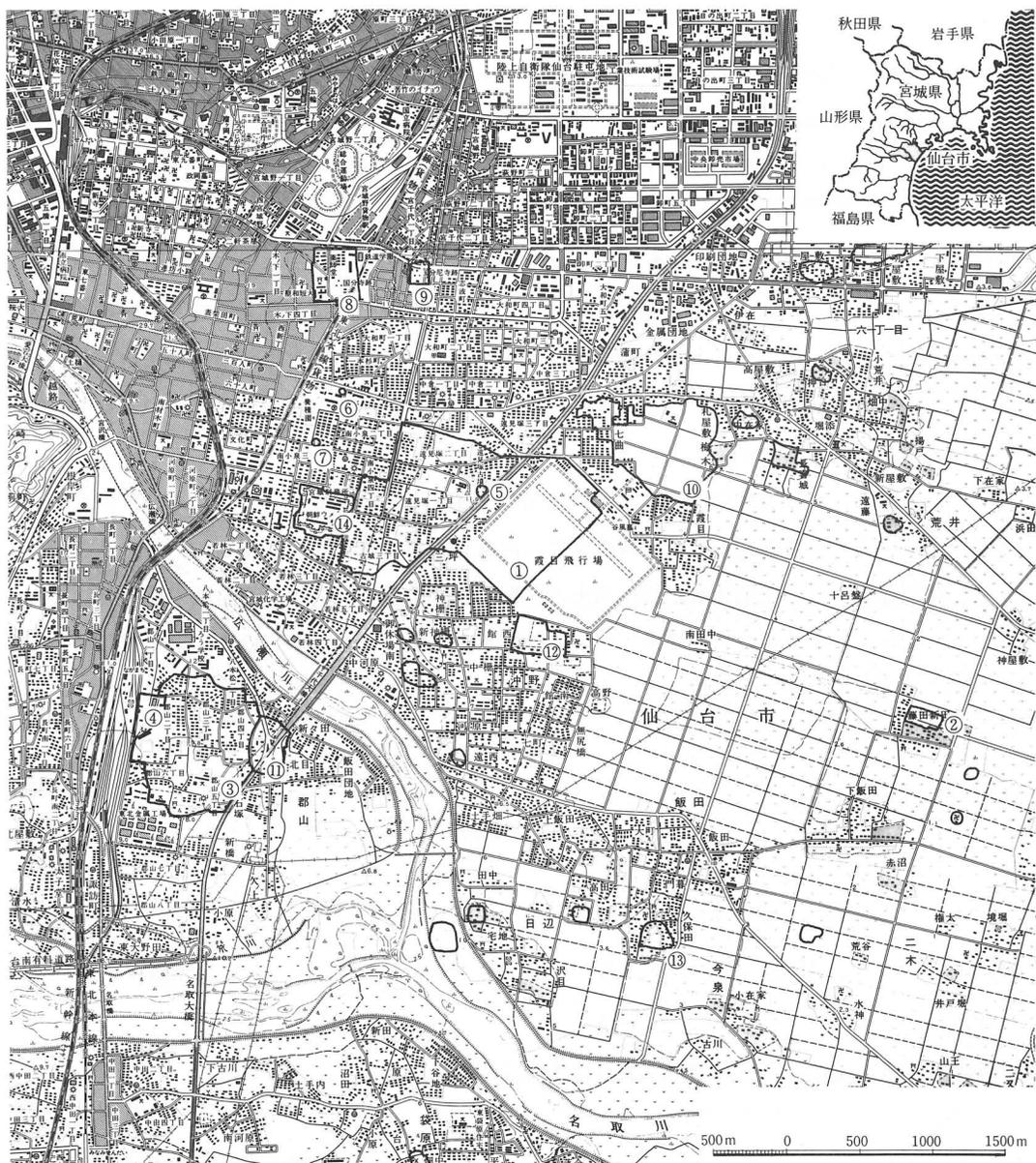
この中を流れる名取川の支流広瀬川は、その左岸に自然堤防・後背湿地などの複雑な微地形を形成している。本遺跡は、自然堤防上に立地しており、標高は11m前後である。

3．歴史的環境

仙台市南東部の古城、即ち若林城一帯は藩政時代「若林」と汎称されていた。それ以前の仙台城下町創設時には、この地方は「小泉村」と呼ばれていた。「小泉村」は、当時、南目村・荒巻村・根岸村などと入会になっていた大村で、現在の南小泉地区は旧小泉村の一部である。この「小泉」という地名は、その名の通り古くから良質で豊富な清水が湧き出していたという言い伝えから生まれたものであると考えられている。

明治維新後、町村行政の整理統合に伴い宮城郡高城郷(松島地方)の小泉村と、国分郷「小泉村」との混称を避けるため、高城郷を北小泉村、国分郷を南小泉村と改称した(註3)。現在、南小泉遺跡内に含まれる地域は、本章第一節で述べた範囲である。

南小泉遺跡の存在が知られるようになったのは昭和11年頃で、畑の天地返しによって多くの弥生土器・土師器の破片が出土することが松本源吉氏によって注目された時に遡る。その後、昭和14年春から16年春にかけて霞ノ目飛行場の拡張工事の際に、飛行場の西側で土採りが行われ多数の竪穴住居跡・土器等が発見され、古代の一大集落跡の存在が確実なものとなったのであ



| No. | 遺跡名 | 登録番号 | 種別 | 立地 | 年代 |
|-----|---------|---------|--------|------|---------------|
| 1 | 南小泉遺跡 | C - 102 | 集落 | 自然堤防 | 弥生 ~ 近世 |
| 2 | 藤田新田遺跡 | C - 103 | 集落 | 浜堤 | 弥生 |
| 3 | 郡山遺跡 | C - 104 | 官衙・寺院跡 | 自然堤防 | 古墳(末期)~奈良(初期) |
| 4 | 西台畑遺跡 | C - 105 | 包含地 | 自然堤防 | 縄文・弥生・古墳 |
| 5 | 遠見塚古墳 | C - 001 | 古墳 | 自然堤防 | 古墳 |
| 6 | 法領塚古墳 | C - 003 | 古墳 | 沖積平野 | 古墳 |
| 7 | 猫塚古墳 | C - 004 | 古墳 | 沖積平野 | 古墳 |
| 8 | 陸奥国分寺跡 | C - 419 | 寺院跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 |
| 9 | 陸奥国分尼寺跡 | C - 420 | 寺院跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 |
| 10 | 仙台東郊条里跡 | C - 421 | 条里跡 | 沖積平野 | 奈良・平安 |
| 11 | 北目城跡 | C - 505 | 城館跡 | 自然堤防 | 室町・江戸 |
| 12 | 沖野城跡 | C - 506 | 城館跡 | 自然堤防 | 中世 |
| 13 | 今泉城跡 | C - 507 | 集落・城館跡 | 自然堤防 | 縄文(後期)~近世 |
| 14 | 若林城跡 | C - 511 | 城館跡 | 自然堤防 | (中)・近世 |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

る。

周辺の遺跡を各時代毎に概観すると(第1図)、弥生時代としては本遺跡と西南西約2.5kmに西台畑遺跡、東南東約3kmに藤田新田遺跡がある。古墳時代では、中期に本遺跡の中心部に、東北地方では第3位の規模を誇る主軸長110mの前方後円墳・遠見塚古墳が築かれている。また、本遺跡の西約1kmに法領塚古墳・猫塚古墳がある。7世紀の後半から8世紀初頭にかけて、本遺跡の南西約2kmに中央政府の支配体制と結びつけられる多賀城以前の官衙遺跡である郡山遺跡が造営された。奈良時代になると、本遺跡の北北東約2kmの地に陸奥国分寺・同尼寺跡が造営された。さらに、中世から近世にかけては本遺跡西の若林城をはじめ、南西約2kmに北目城、南東約1kmに沖野城が築かれる。このように、古来から本遺跡一帯が仙台平野の中でも中心的な地域であったことがうかがえる。

南小泉遺跡内における発掘調査は、年々増加の一途をたどっている。このため、今年度の調査区を含めた過去の発掘調査地点や調査成果に混乱をまねく恐れが生じてきている。そこで、当文化財調査係では、今年度漸定的に過去の発掘調査区を年度別にまとめ整理することにした(第2図)。尚、各年度毎の調査成果については第1表に概略をまとめている。以上、これまでの本遺跡の発掘調査からは、弥生時代から中・近世に至る多くの遺構と遺物が発見されている。しかし、遺跡全体が広大な面積を有しており、遺跡の全貌の一端が解明されているに過ぎない。

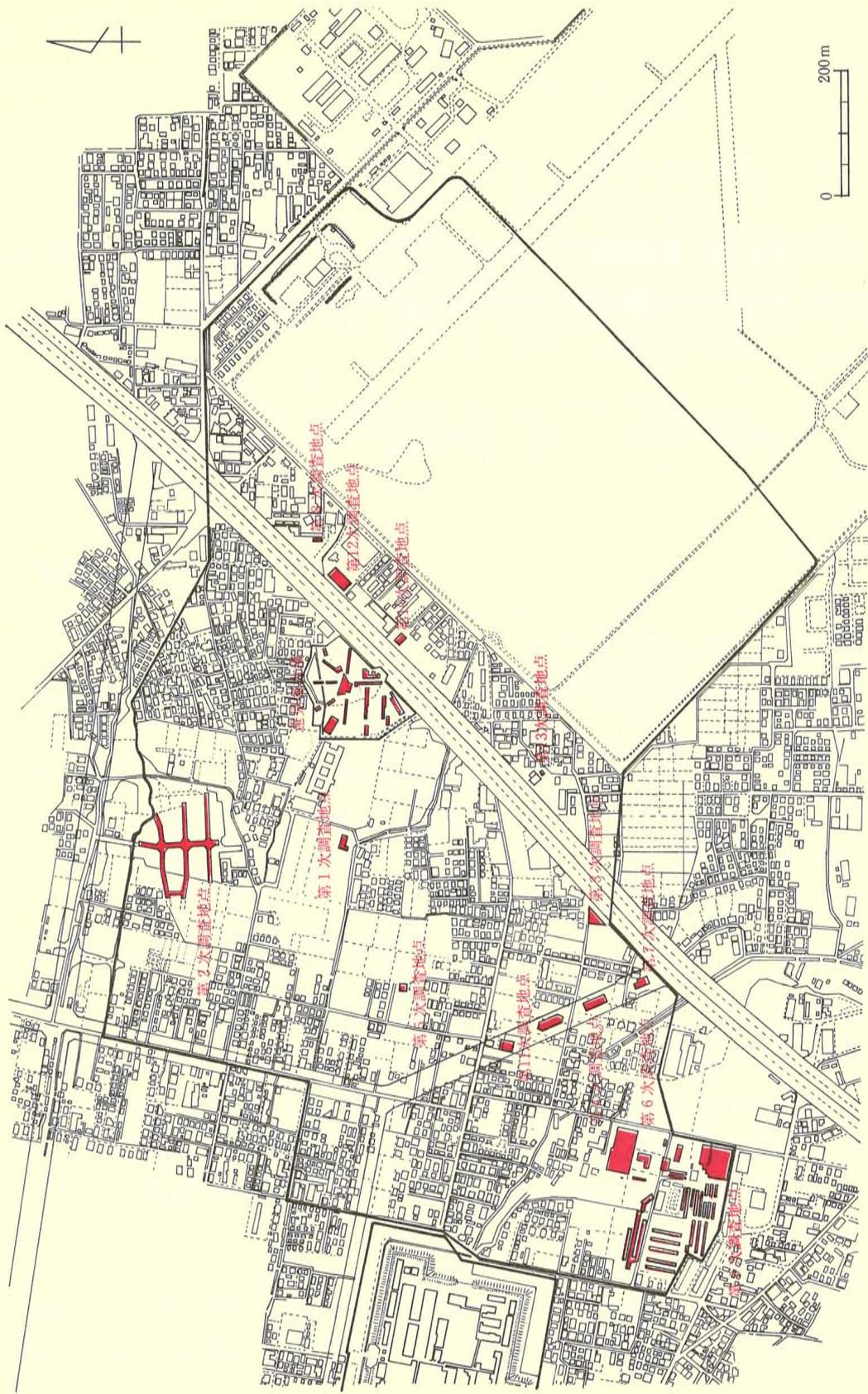
IV. 調査の方法

調査区は敷地内のうち、浄化槽建設予定地全体を可能な限りカバーするように、東西7.5m、南北4mの長方形を設定した。表土(盛土層)は約1.8m前後あり、9月10日に重機により排土を行った。

測定の起点は、併設される事務所南角の基礎コーナーとし、これよりN-80°Eの角度で3.4mの地点を測量原点とした。測量基準線は原点をもとに3m方眼とし、東西方向は算用数字、南北方向はアルファベットで表わし、地区設定をした(第3図)。実測図の縮尺は、住居跡・溝跡・遺物の出土状況・遺構の断面図については $\frac{1}{50}$ とした。レベル記入の基準標高は、9.90mである。

V. 基本層位

本調査区は、既述のように名取川の支流、広瀬川が左岸に形成した自然堤防上に立地している。このため、旧耕作土が粘土質土壌となっている他は、シルト質土壌が厚く堆積している。



第2図 南小泉遺跡年度別発掘調査区位置図

| 南小泉遺跡調査年度 | 遺構年代 | 検出遺構 | 調査時出土遺物 | 文献 |
|---|------------------|---|---|----|
| 第1次(昭和52年) | 平安時代 不 | 溝状遺構。 小溝状遺構。 | 弥生土器(柵形囲式)。土師器(南小泉式・表杉ノ入式)。須恵器。陶磁器。瓦。石器(剝片)。石製品。石製模造品。鉄製品。 | 1 |
| 第2次(昭和53年) | ——— | ——— | 弥生土器。土師器(南小泉式)。須恵器。 | 2 |
| 第3次(昭和55年) | 平安時代 | 住居跡(1軒)。 | 土師器(表杉ノ入式)。須恵器。 | 3 |
| 第4次(昭和56年) | 古墳時代中期 | 住居跡(5軒)。土壌。土壌状遺構。 焼土遺構。溝跡。 | 弥生土器(大泉式・十三塚式)。土師器(南小泉式・表杉ノ入式)。須恵器。陶磁器(中・近世)。瓦(古代)。土製品(土玉、羽口等)。石器(石鏃、スクレイパー等)。石製品(管玉、小玉、紡錘車、砥石、硯等)。石製模造品。鉄製品(鎌、刀子、鏃、釘等)。銅製品(中国銭)。 | 4 |
| | 平安時代 中 | 住居跡(10軒)。土壌。溝跡。 掘立柱建物跡(4棟)。土壌。 溝跡。ピット。 | | |
| 第5次(昭和56年) | 不 | 縦穴状遺構。土壌。溝跡。 | 土師器(南小泉式・栗囲式・表杉ノ入式) | 5 |
| | 明 | 溝跡。 | | |
| 第6次(昭和56 ~57年) | 平安時代以前 平安時代 | 住居跡(2軒)。掘立柱建物跡(4棟)。 土壌。 | 弥生土器(大泉式)。土師器(南小泉式・栗囲式・国分寺下層式・表杉ノ入式一墨書土器含)。赤焼土器。須恵器。土師質土器。陶磁器(中世・近世)。瓦(古代)。土製品(土玉等)。石製品(石包丁、石帯、砥石等)。風字硯。鉄製品(鋤先、鎌、刀子、鉄滓等)。銅製品(古銭等)。動植物遺体。 | 6 |
| | 近世以降 明 | 井戸跡。 掘立柱建物跡。土壌。井戸跡。溝跡。 | | |
| 第7次(昭和57年) | 平安時代以前 平安時代 | 土壌。小溝状遺構。溝跡。 住居跡(2軒)。土壌。性格不明遺構。 ピット。 | 弥生土器(柵形囲)。土師器(南小泉ノ引田式・表杉ノ入式)。須恵器。陶器(近世)。瓦(古代・近世)。土製品(羽口)。石器(石鏃等)。石製品(紡錘車、石臼等)。鉄製品(鋤先、釘?、鉄滓等)。動植物遺体。 | 7 |
| | 平安時代以降 近世 | 溝跡。 井戸跡。 | | |
| | 不 | 土壌。溝跡。ピット。 | | |
| 第8次(昭和57年) | ——— | 土壌。 | 弥生土器。土師器(南小泉式) | 8 |
| 第9次(昭和57年) | 平安時代 中世 | 住居跡(2軒)。 溝跡。 | 土師器(表杉ノ入式)。須恵器。土師質土器。陶器(中世・近世初頭)瓦(古代)。石製品(砥石、石鉢)。金屬製品(中国銭)。漆器。 | 9 |
| | 桃山~江戸初頭 不 | 掘立柱建物跡(棟)。井戸跡。 土壌。井戸跡。溝跡。 | | |
| 第10次(昭和57年) | 古墳時代中期 不明 | 住居跡(5軒)。 掘立柱建物跡?。土壌。溝跡。ピット。 | 弥生土器(柵形囲式・十三塚式)。土師器(南小泉式)。須恵器。石器(石鏃等)。石製品(紡錘車、砥石等)。石製模造品。 | 10 |
| 第11次(昭和58年) | 古墳時代後期 古墳時代末期 | 住居跡(4軒)。土壌。溝跡。 住居跡(1軒) | 弥生土器(大泉式)。土師器(住社式・住社式併行・国分寺下層式・表杉ノ入式一墨書土器含)。須恵器。土師質土器。陶磁器(中世・近世)。瓦。土製品(土錘)。石器(石鏃、石錐、石篋、スクレイパー、石核等)。石製品(勾玉、石包丁、砥石等)。石製模造品。板碑。鉄製品(刀子、釘、鉄滓等)。銅製品(箱、煙管、中国銭)。骨(加工痕)。炭化木。動植物遺体。 | 11 |
| | 平安時代 中世 | 住居跡(3軒)。掘立柱建物跡(2棟)。土壌。 掘立柱建物跡(3棟)。土壌。溝跡。 墓壇。 | | |
| | 桃山~江戸初期 | 土倉跡。土壌。溝跡。 | | |
| 第12次(昭和59年) | 弥生時代中期 弥生時代後期 | 溝跡。 土壌。 | 弥生土器(柵形囲式・十三塚式・天王山式併行)。土師器(南小泉式・国分寺下層式)。須恵器。陶磁器(中世・近世)。瓦(近世)。 | 12 |
| | 古墳時代中期 奈良時代 | 住居跡(1軒)。土壌。溝跡。ピット 土壌。ピット。 溝跡。ピット。 | | |
| 第13次(昭和59年) | 古墳時代中期 不 | 住居跡(1軒、建て替えあり)。 溝跡。 | 土師器(南小泉式)。須恵器。陶磁器。石器(剝片)。 石製模造品、鉄製品(鏃)。植物遺体。 | 13 |
| 遠見塚古墳 (C-001) 昭和43年11月8日 国指定史跡 | ——— | 墳丘規模：主軸約110m(後円部径約63m、前方部約47m)。前方部幅約37m。接点部幅約21.5m。後円部 高約6.7m。前方部高約2.5m。 | 出土遺物一堅楡20、ガラス製小玉4、碧玉製管玉1 | 14 |
| | ——— | 主体部：粘土槨(2基)、木棺?。 | | 15 |
| | ——— | 周濠及び墳丘出土遺物：弥生土器(桑原文系土器・柵形囲式・十三塚式・天王山式)。土師器(壺釜式、南 小泉式、引田式)。須恵器。陶磁器。石器(石鏃、石錐、スクレイパー、石斧等) | | 16 |
| | ——— | 石製模造品等。 | | 17 |
| | ——— | ——— | | 18 |

- 文献1. 市教委 第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一(昭和53年3月)
2. 南小泉遠見塚調査団 南小泉遺跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
3. 市教委 第28集 年報2(昭和56年3月)
4. 市教委 第35集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告一(昭和57年3月)
5. 市教委 第41集 年報3(昭和57年3月)
6. 市教委 第55集 南小泉遺跡一青葉女子学園移設新営工事地内調査報告一(昭和58年3月)
7. 市教委 第52集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告一(昭和58年3月)
8. 市教委 第57集 年報4(昭和58年3月)
9. 県教委 南小泉遺跡(昭和58年3月)
10. 市教委 第60集 南小泉遺跡一倉庫建設に伴う緊急発掘調査報告書一(昭和58年3月)

11. 市教委 第68集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第3次調査報告書(昭和59年3月)
12. 市教委 第80集 南小泉遺跡一第12次発掘調査報告書一(昭和60年3月)
13. 市教委 第81集 南小泉遺跡一第13次発掘調査報告書一(昭和60年3月)
14. 市教委 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
15. 市教委 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
16. 市教委 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
17. 市教委 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
18. 市教委 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
19. 市教委 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報(昭和58年3月)

第1表 南小泉遺跡(C-102)発掘調査年度別成果一覽表

調査区内における基本層位の状況は、以下の通りである（第4図）。

第1層：旧水田耕作土とその床土とから成る。

第1a層：盛土以前の旧水田耕作土で黄灰色シルト質粘土層から成る。層厚は4～13cmを計る。

第1b層：旧水田耕作土の床土となっていた酸化鉄の集積層で、シルト質粘土層から成る。層厚は2～5cmを計る。

第2層：第1層以前の水田耕作土とその床土から成る。

第2a層：第1層以前の水田耕作土で、褐灰色シルト質粘土層から成る。層厚は4cm前後を計る。1・2号溝跡が検出された。

第2b層：第1層以前の水田耕作土の床土となっていた酸化鉄の集積層で、シルト質粘土層から成る。層厚は2～5cmを計る。

第3層：第2層以前の水田耕作土で、褐灰色シルト質粘土層から成る。層厚は5～12cmを計り、下面にうすく酸化鉄の集積層が認められる。

第4層：地山を形成する層である。

第4a層：浅黄色の粘土質シルト層で、マンガン粒を多量に含む。層厚は14～33cmを計る。1・2・3号住居跡、3号溝跡が検出された。

第4b層：第4a層と比較しやや暗いが、同一の土色・土性の層である。層厚は60cm以上を計る。

VI 発見遺構と出土遺物

1. 2a層上面検出の遺構と遺物

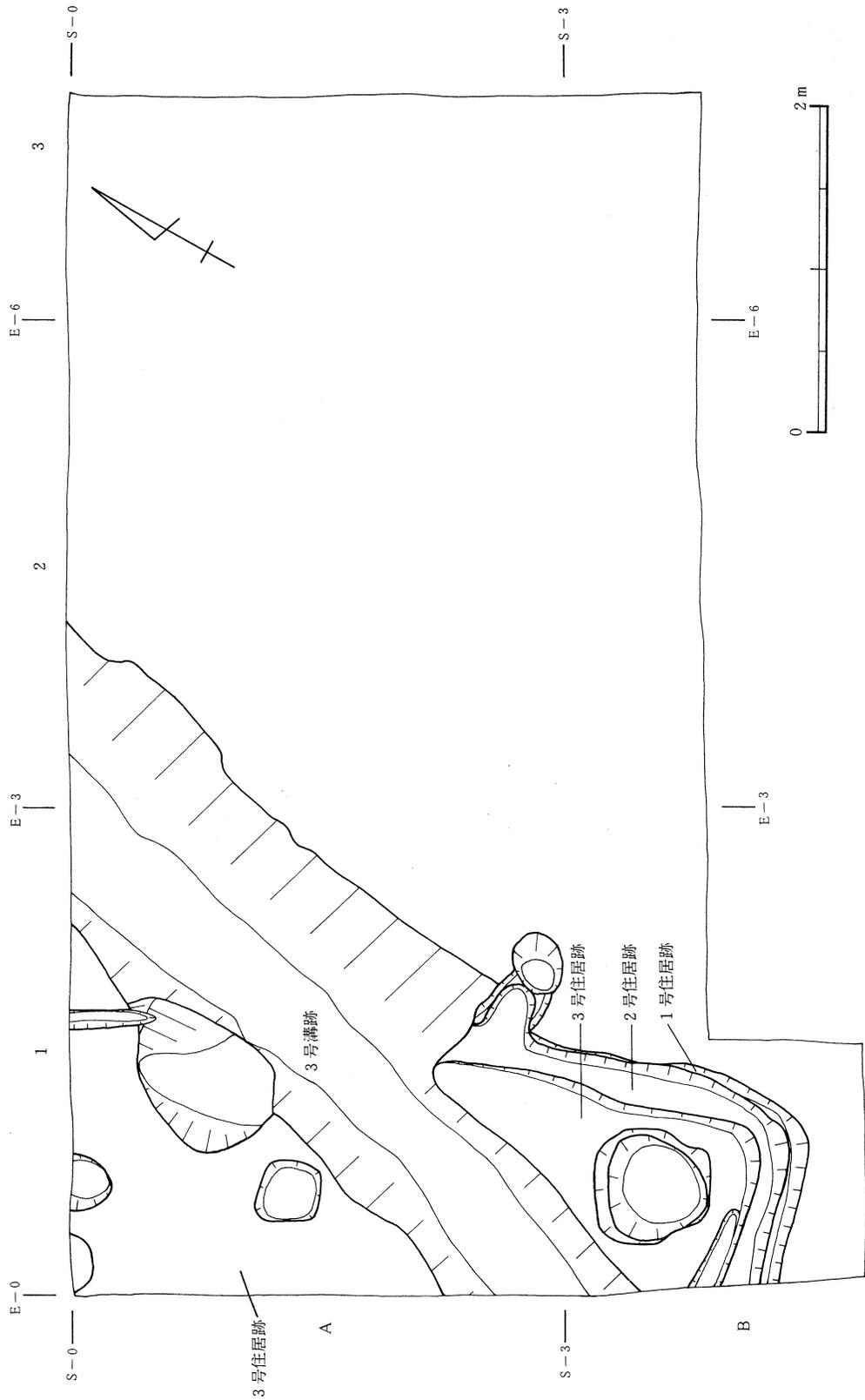
盛土以前、最近まで耕作されていた水田面（第1層）直下の旧水田面、第2a層上面で溝跡2条を検出した（第5図）。

(1) 1号溝跡

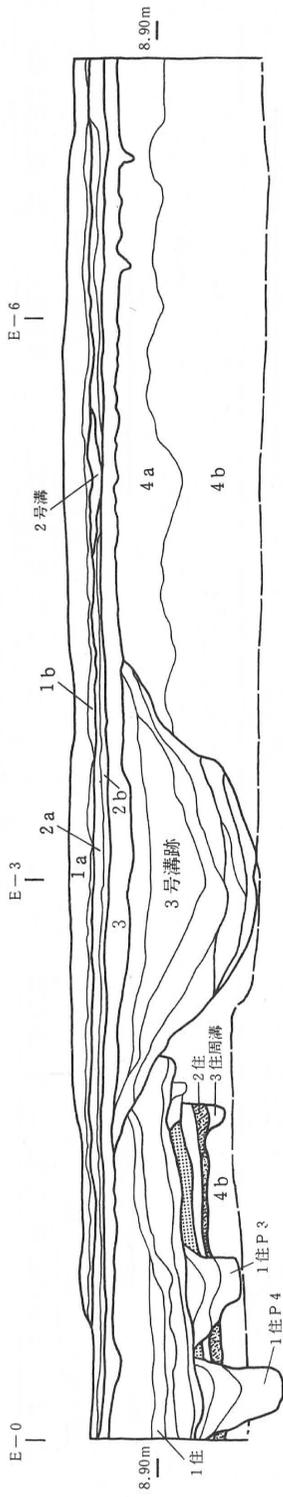
この溝は、A-3区からB-2区にかけて一部削平されているが、長さ約5.2mにわたり検出された。上端幅20～74cm、底面幅8～28cm、深さ2～6cmを計り、断面形は扁平な「U」字形である。溝の方向はN-30°-35°Eである。堆積土は1層で黄灰色シルト質粘土である。底面のレベルは北から南にかけて低くなっている。出土遺物は、土師器片3点である。いずれも磨滅が著しい。

(2) 2号溝跡

A-2区からB-1区にかけて、長さ約6.4mにわたって検出された。上端幅30～50cm、底面幅20～35cm、深さ5～8cmを計り、断面形は「U」字形である。方向はN-20°-Eを計る。堆積土は1層で暗灰黄色シルト質粘土である。底面のレベルは、北から南にかけて低くなって

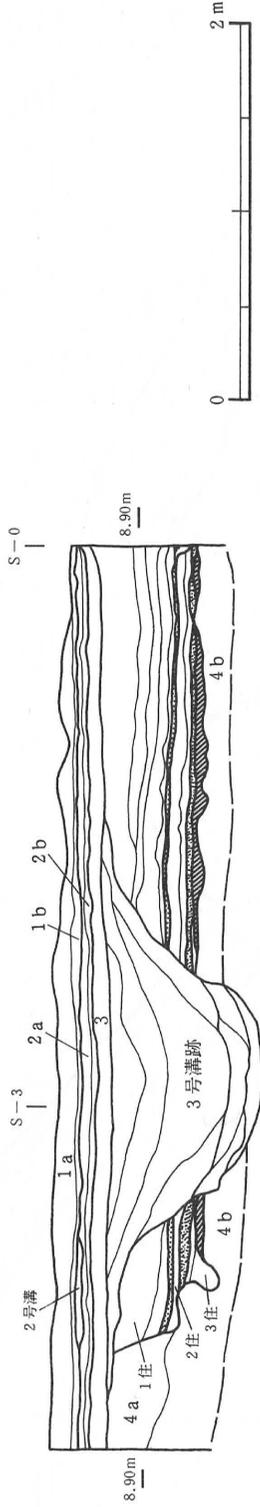


第3図 遺構配置図



北壁断面図～

: 1住貼床
 : 2住貼床

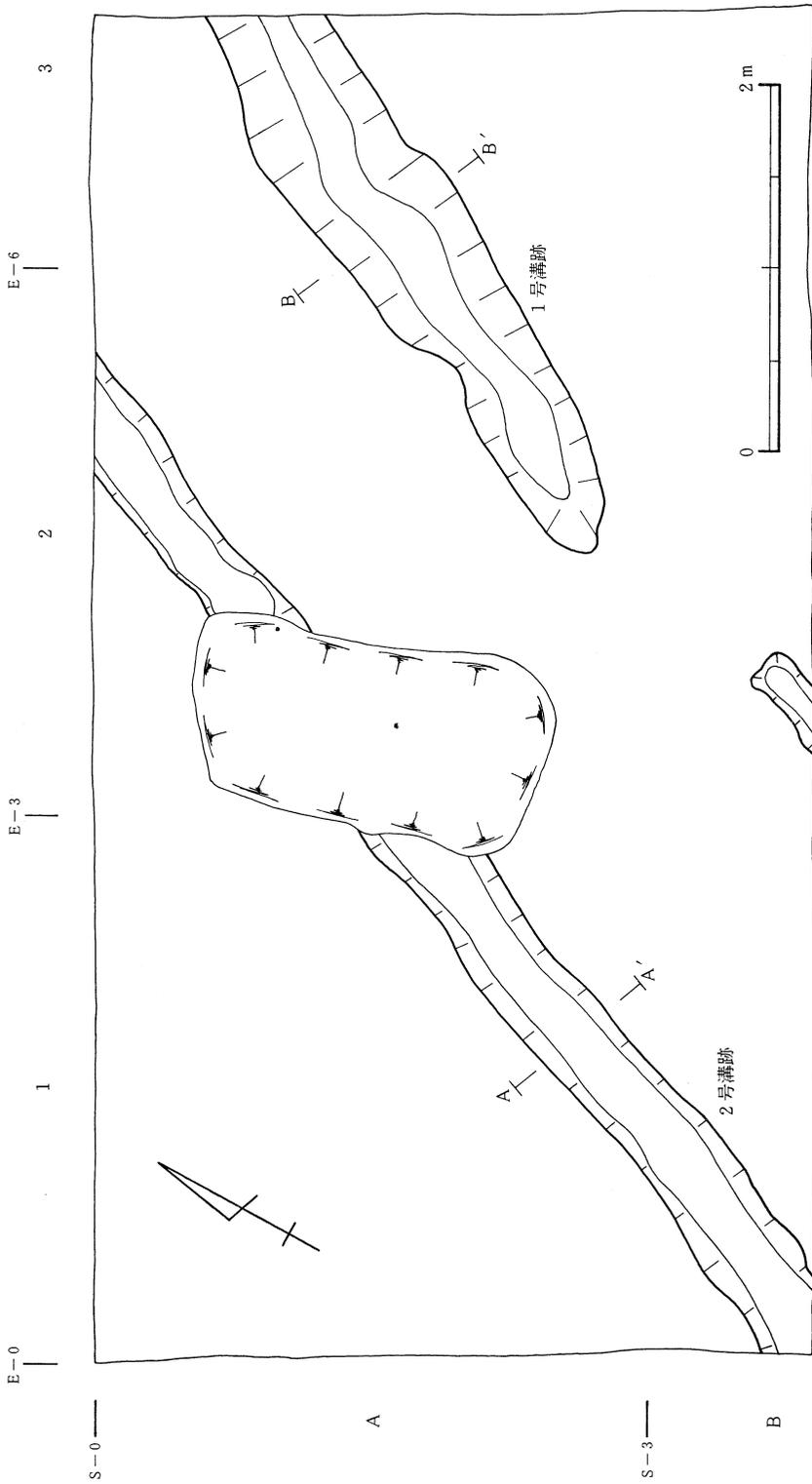


西壁断面図～

: 1住貼床
 : 2住貼床
 : 3住貼床

| 層No | 土色 | 土性 | その他 |
|-----|------------|--------|-----------------------------------|
| 1 a | 2.5Y 灰黄色 | シルト質粘土 | |
| 1 b | 10YR% 明黄褐色 | シルト質粘土 | 酸化鉄を多量に含む |
| 2 a | 10YR% 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄を斑状に含む |
| 2 b | 10YR% 明黄褐色 | シルト質粘土 | 酸化鉄を多量に含む |
| 3 | 10YR% 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄を多量に含む、マンガングラン粒を斑状に少量含む |
| 4 a | 2.5Y % 浅黄色 | 粘土質シルト | 明黄褐色粘土質シルト及びマンガングラン粒を多量に含む |
| 4 b | 2.5Y % 浅黄色 | 粘土質シルト | にふい黄褐色シルト及びマンガングラン粒を含む、4 a層よりやや暗い |

第4図 調査区北壁・西壁断面図



| 層 No | 土色 | 土性 | その他 |
|------|---------------|--------|-----------|
| 1 | 2.5Y 4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | |
| 1 | 2.5Y 5/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | 下部に酸化鉄を含む |

第5図 1・2号溝跡平面図・断面図

いる。出土遺物は、土師器片3点、陶磁器片2点、鉄製品1点である。

2. 4a層上面検出の遺構と遺物

第3層の水田耕作土直下、第4a層上面で住居跡3軒、溝跡1条を検出した。尚、3軒の住居跡は、2回の改築・拡張で3時期にわたる住居跡と考えられるものである。以下、各住居跡については、1・2・3号住居跡の順で記述する。

(1) 1号住居跡

A・B-1区、第4a層上面で検出された(第6図)。

〔平面形・規模・方向〕住居跡の南壁と東壁の一部を検出したのみで、全体の形状・規模は不明である。東西長4.4m以上、南北長4.5m以上を計る。東壁の方向はN-20°-Wを計る。

〔重複関係〕2・3号住居跡を切っており、3号溝跡に切られている。

〔堆積土〕深さ25~45cmで住居跡北西側ほど厚く堆積しており、5層に細分される。第1層はにぶい黄褐色シルト層で、住居跡の中央に広く分布している。第2層は灰黄褐色粘土質シルト層で、住居跡中央に分布している。第3層は褐灰色粘土質シルト層で、住居跡全体に分布し、薄く堆積している。第4層は褐灰色粘土質シルト層で、住居跡全体に分布し壁際ほど厚く堆積している。第4層までの各層からは土師器片が出土している。第5層は褐灰色シルト層で、貼床上面に薄く堆積している。

〔壁・床面〕壁高は25cmを計り、壁の立ち上がりは70°~75°である。床面は層厚2~8cmの明黄褐色シルトによる貼床で、住居跡北西側がやや低くなっている。

〔柱穴〕床面上で5基のピットが検出されたが、住居跡全体の規模も不明なため、柱穴と断定できるものはなかった。

〔カマド〕東壁やや南寄りで、南東コーナーから約1.8mの位置で検出された。右袖部と煙道部が遺存しているが、左袖部は3号溝跡により切られ、全体の規模は不明である。右袖部は黄褐色粘土質シルトによる袖で、残存長は60cm、幅15~25cmを計る。煙道は長さ40cm、幅34cmを計り約20°の角度で立ち上がっている。煙道先端には40×30cm、深さ16cmの楕円形を呈する煙り出しピットを持つ。カマド主軸方向はN-84°-Eで、壁方向から直角ではなく南側に約10°のずれがある。燃焼部底面は赤褐色を呈し、固く焼きしまっている。

〔その他の施設〕貼床上面でピットを5基(P1~P5)検出した。

P1：直径13cm、深さ6cmを計り、円形を呈する。堆積土は1層である。にぶい黄褐色の粘土質シルト層で、層中に焼土・炭化物を含む。

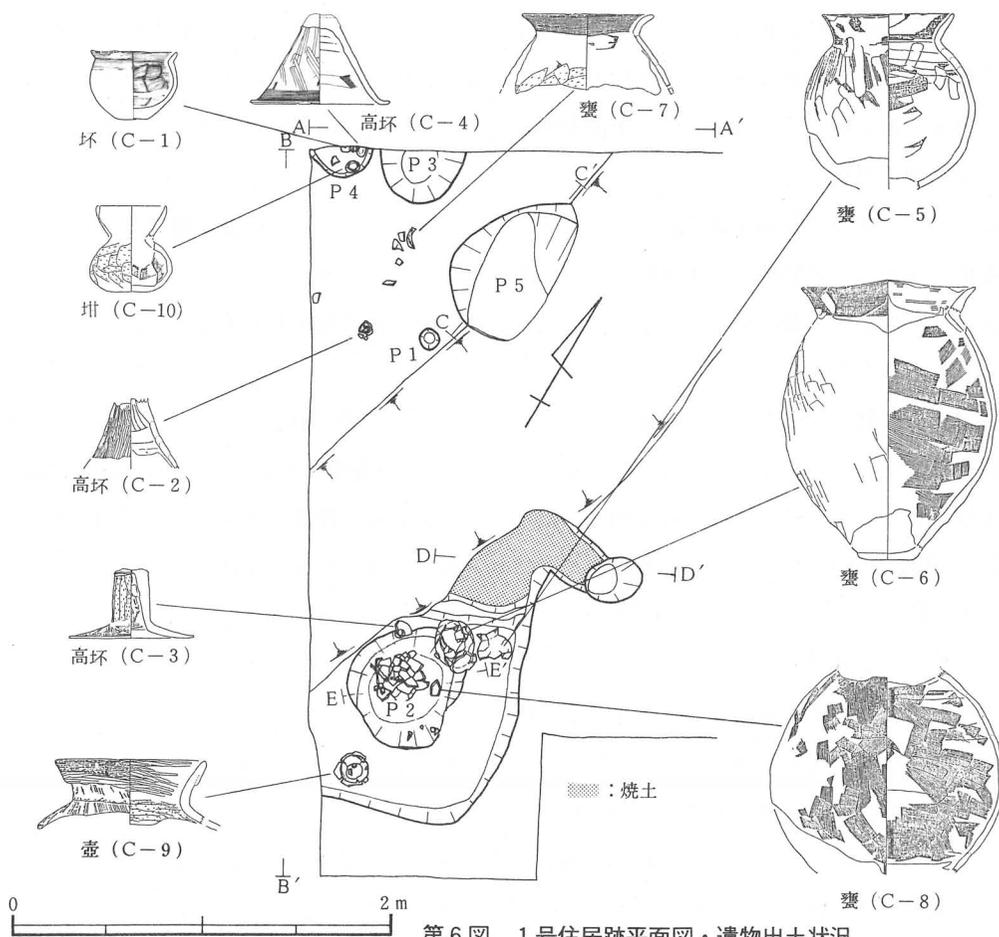
P2：カマド右脇で検出された。長径80cm、短径70cm、深さ27cmを計り、不整形の楕円形を呈する。堆積土は3層に分けられる。1層はにぶい黄褐色の粘土層、2層はにぶい黄褐色のシル

ト質粘土層、3層はにぶい黄褐色シルト層である。貯蔵穴と考えられる。堆積土3層中より、土師器甕(C-8)が出土している。

P3：全体の規模は不明である。残存部は長径50cm・短径35cm以上、深さ27cmを計り、楕円形を呈すると考えられる。堆積土は3層に分けられる。1層は灰黄褐色の粘土質シルト層、2層は灰黄褐色の粘土層、3層は明黄褐色の粘土質シルト層である。堆積土3層中より、土師器片が26点出土している。

P4：全体の規模は不明である。残存部は長径43cm以上、短径22cm以上、深さ46cmを計り、円形を呈すると考えられる。堆積土は3層に分けられる。1層は浅黄色シルト質粘土層、2層は褐灰色の粘土層、3層は、にぶい黄燈色の粘土層である。底面から土師器環(C-1)、高環(C-4)・埴(C-10)が出土している。

P5：3号溝跡に切られており、全体の規模は不明である。残存部は長径105cm、短径70cm、深さ45cmを計り、楕円形を呈すると考えられる。堆積土は大別4層で、7層に細分される。1層は褐灰色シルト層、2a層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層、2b層はにぶい黄褐色のシルト層、



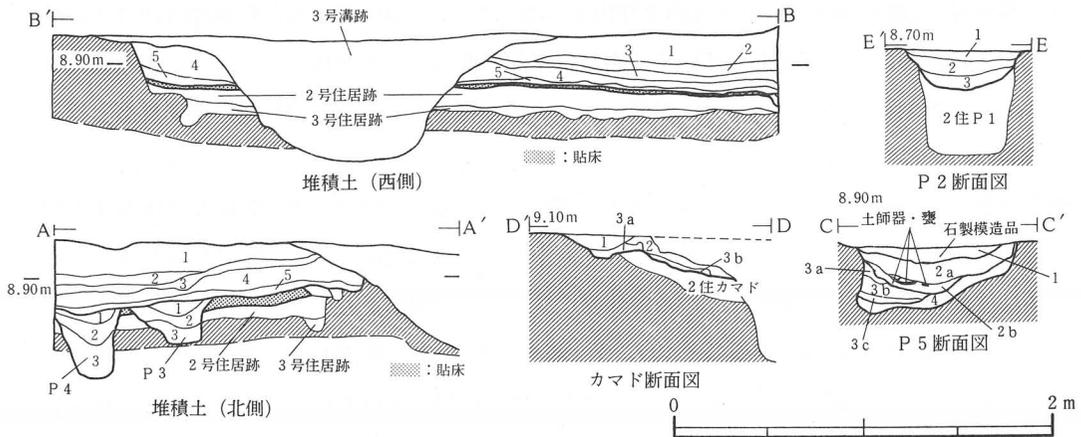
第6図 1号住居跡平面図・遺物出土状況

3a層は浅黄色のシルト層、3b層はにぶい黄褐色のシルト層、3c層は、炭化物・焼土を多量に含む黒色のシルト層である。4層は浅黄色のシルト層である。1層中より鉄鏝(N-1)、2a層上面より石製模造品(K-1)、2b層中・3a層上面より土師器甕の体部片が出土している。貯蔵穴と考えられる。

〔遺物出土状況〕 堆積土第5層を除く、各層及び床面から出土している。

第1層：土師器片115点・鉄滓1点・礫5点、第2層：土師器片23点・礫4点、第3層：土師器片91点・鉄滓1点・礫2点、第4層：土師器片30点・鉄滓5点・礫5点

床面からは、土師器坏(C-1)・高坏(C-2・3)・甕(C-5・6・7)・壺(C-9)・甑(C-11)の他、土師器片12点が出土している。ピットからの遺物出土状況は既述の通りである。この中で、床面出土の土師器甕(C-5・6)は、カマド右袖部右側に並べて置かれた状態で出土している。また、P4底面出土の土師器坏(C-1)・高坏(C-8)は、高坏の裾部が上になり坏の中に組み合わされた状態で出土している。



堆積土

| 層No | 土色 | 土性 | その他 |
|-----|-----------------|--------|---------------------|
| 1 | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | シルト | 土師器片を多く含む、炭化物を少量含む |
| 2 | 10Y R 5/6灰黄褐色 | 粘土質シルト | 土師器片出土、炭化物を少量含む |
| 3 | 10Y R 5/6褐灰色 | 粘土質シルト | 土師器片を多く含む |
| 4 | 10Y R 5/6褐灰色 | 粘土質シルト | 土師器片出土、炭化物を多量に含む |
| 5 | 10Y R 5/6褐灰色 | シルト | 炭化物を含む |
| 貼床 | 10Y R 5/6明黄褐色 | シルト | 土師器(壺・甕・高坏)出土、しまり強し |

カマド

| 層No | 土色 | 土性 | その他 |
|-----|---------------|--------|------------------------------|
| 1 | 10Y R 5/6黒褐色 | 粘土質シルト | 炭化物・焼土を斑状に含む |
| 2 | 10Y R 5/6黒褐色 | シルト | 10Y R 5/6褐灰色シルト・焼土・炭化物を斑状に含む |
| 3 a | 7.5Y R 5/6黒褐色 | シルト | 10Y R 5/6明黄褐色シルト・焼土を多量に含む |
| 3 b | 10Y R 5/6黒褐色 | シルト | 焼土を多量に含む、灰を少量含む |

ピット

| 層No | 土色 | 土性 | その他 |
|-----|-----------------|--------|---------------------------------------|
| P1 | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | 粘土質シルト | 炭化物・焼土を斑状に含む |
| P1 | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | 粘土 | 炭化物を少量含む |
| P2 | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | シルト質粘土 | 土師器片・炭化物を含む |
| P2 | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | シルト | 土師器(甕)出土、炭化物を含む |
| P2 | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | 粘土質シルト | 炭化物を少量含む |
| P3 | 10Y R 5/6灰黄褐色 | 粘土 | 10Y R 5/6明黄褐色シルト・10Y R 5/6黒褐色粘土を斑状に含む |
| P3 | 10Y R 5/6明黄褐色 | 粘土質シルト | 炭化物を斑状に含む。土師片出土 |

| | | | | |
|----|----|-----------------|--------|-------------------------------------|
| P4 | 1 | 2.5Y 7/6浅黄色 | シルト質粘土 | 2.5Y 5/6灰褐色粘土をブロック状に含む |
| P4 | 2 | 10Y R 5/6褐灰色 | 粘土 | 炭化物を少量含む、10Y R 5/6明黄褐色粘土を斑状に含む |
| P4 | 3 | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | 粘土 | 土師器(甕・高坏・壺)出土、炭化物を多量に含む |
| P4 | 1 | 10Y R 5/6褐灰色 | シルト | 炭化物を少量含む、10Y R 5/6明黄褐色シルトを斑状に含む |
| P5 | 2a | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | 粘土質シルト | 上面に石製模造品出土 |
| P5 | 2b | 2.5Y 5/6にぶい黄褐色 | シルト | 土師器(甕)片出土 |
| P5 | 3a | 2.5Y 7/6浅黄色 | シルト | 焼土粒及び炭化粒を少量含む、10Y R 5/6褐灰色シルトを斑状に含む |
| P5 | 3b | 10Y R 5/6にぶい黄褐色 | シルト | 土師器片出土、径1~3cmの焼土・炭化物を斑状に含む |
| P5 | 3c | 2.5Y 黒色 | シルト | 炭化物及び焼土を多量に含む |
| P5 | 4 | 2.5Y 7/6浅黄色 | シルト | 焼土粒をブロック状に含む |

第7図 1号住居跡断面図

〔出土遺物〕

坏C-1 (第8図-5): P4底面より出土した。平底の坏である。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は「く」の字状に短く外傾して立ち上がり、端部は上方に立つ。口縁部径と体部径がほぼ等しい。口縁部内面に稜線を形成する。調整は口縁部から体部上半にかけて内外面ヨコナデ、体部下半は外面にヘラケズリ後ヘラミガキ、内面にヘラナデ、底部はヘラケズリが施されている。内外面に丹塗りが観察される。

高坏C-2 (第9図-6): 床面より出土した。円錐台状に開く脚部の上半部分である。調整は、外面にヘラミガキ、内面に指ナデが施されている。

高坏C-3 (第9図-4): 床面より出土した。坏部を欠損している。中空柱状部は、やや脹みをもち、裾部は外方に大きく開き裾端部に至る。調整は、柱状部外面にヘラケズリ、裾部にヘラナデ、裾端部にヨコナデが施され、柱状部内面上半にはシボリ目、下半から裾端部にかけてヘラナデが施されている。

高坏C-4 (第9図-5): P4底面より出土した。坏部を欠損している。裾部は円錐台状に開き出し、裾端部は外方に屈曲している。調整は裾部外面にヘラナデ後ヘラミガキ、裾端部にヨコナデ、内面上半にはヘラケズリ、裾部にヘラナデが施されている。台付甕の裾部片とも見られる(註4)。

甕C-5 (第8図-3): カマド右袖右側より、甕C-6と並んで出土した。底部及び体部下半の一部を欠損している。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。最大径は体部中央にある。調整は、口縁部外面にヨコナデ、頸部から体部にかけてナデ(一部ヘラナデ)が施され、口縁部内面にヨコナデ(一部ヘラケズリ)、体部にはナデ(一部ヘラナデ)が施されている。内面には粘土紐による巻き上げ痕が明瞭に観察される。体部下半から底部にかけて二次加熱を受けている。

甕C-6 (第8図-2): カマド右袖右側より、甕C-5と並んで出土した。頸部・底部の一部を欠損している。体部はやや長胴形の脹みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。最大径は体部中央にある。調整は、口縁部外面にヨコナデの後、一部にナデ・ヘラミガキ、体部はヘラケズリの後、ヘラミガキが施されている。口縁部内面はヘラミガキ、体部はヘラナデが施されている。また、底部から体部下半には二次加熱による剥離痕が観察される。

甕C-7 (第8図-1): 床面より出土した。体部下半を欠損している。体部はゆるやかな丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。調整は、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面はヘラナデ後ヘラケズリ、体部内面はヘラナデが施されている。

甕C-8 (第9図-3): P2堆積土3層中より出土した。口縁部・底部を欠損している。体部は球形を呈する。調整は、内外面ともヘラナデが施されている。体部下半に二次加熱。

壺C-9 (第9図-1): 床面より出土した。口頸部のみの破片である。頸部から口縁部にかけてやや外傾しながら立ち上がり、口縁部はいわゆる折り返し口縁である。調整は、口縁部外面にヨコナデ後ヘラミガキ、体部上半から頸部はヘラミガキ、内面調整は、口縁部にヘラミガキ、体部から頸部にかけてヘラケズリが施されている。

埴C-10 (第8図-4): P4底面より出土した。口縁部から体部にかけて一部欠損している。平底状の丸底を呈し、体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は外傾して立ち上がり端部は上方に立つ。口縁部内外面は磨滅が著しく調整は不明である。体部から底部外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

甗C-11 (第9図-2): 床面より出土した。無底式の体部下半から底部にかけての破片である。底部径は推定10cmを計り、大型の甗と考えられる。調整は体部外面にヘラミガキ、内面にヘラナデ、孔の周縁にヘラケズリが施されている。

鉄鏃N-1 (第9図-8): P5堆積土1層中より出土した。銹化が著しいが先端部・中茎を欠損しており、全体の形態は不明である。鏃身部は三角形を呈し、逆刺を有している。有茎の平根式鉄鏃である。

石製模造品K-1 (第9図-7): P5堆積土2a層上面より出土した。二孔の有孔円板である。孔は片側穿孔である。表面は擦痕、側面には12面の面取りが観察され、光沢がある。結晶片岩製である(註5)。

第2表 1号住居跡遺物集計表

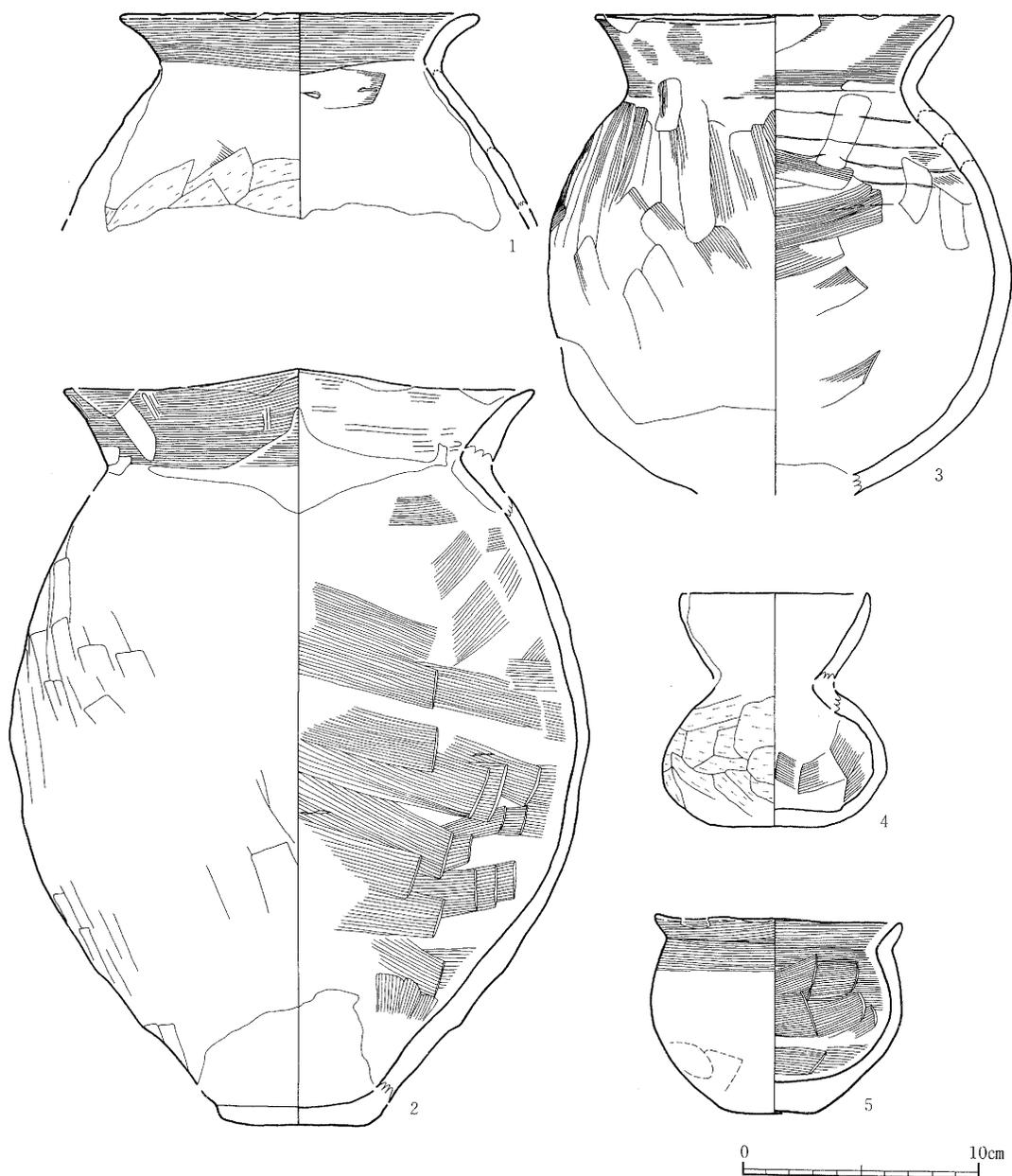
| 出土層位 | 1層 | | | | 2層 | | | | 3層 | | | | 4層 | | | | 5層 | 床面 | ピット | | | | | | | | | | 計 |
|-------|-----|----|----|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|----|----|-----|----|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|------|-----|----|---|----|-----|
| | 土師器 | | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | | 鉄滓 | 礫 | | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | | | | | | |
| | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | | | 3層 | 3層 | 底面 | 1層中 | 2a層上面 | 2b層中 | 3b層 | | | | |
| 種別 | 土師器 | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | 出 | 土師器 | 土師器 | 土師器 | 鉄製品 | 石製模造品 | 土師器 | 土師器 | | | | | |
| 器種 | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 環 | 斐類 | 壺 | 高環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 高環 | 斐類 | 環 | 高環 | 斐類 | 環 | | |
| 個体破片数 | 31 | 18 | 66 | 5 | 1 | 18 | 5 | 4 | 42 | 14 | 35 | 1 | 2 | 14 | 5 | 11 | 5 | 5 | 5 | 1 | 1 | | | | | | | | 423 |
| 実測点数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | 13 | |

(2) 2号住居跡

A・B-1区 1号住居跡貼床直下で検出された(第10図)。

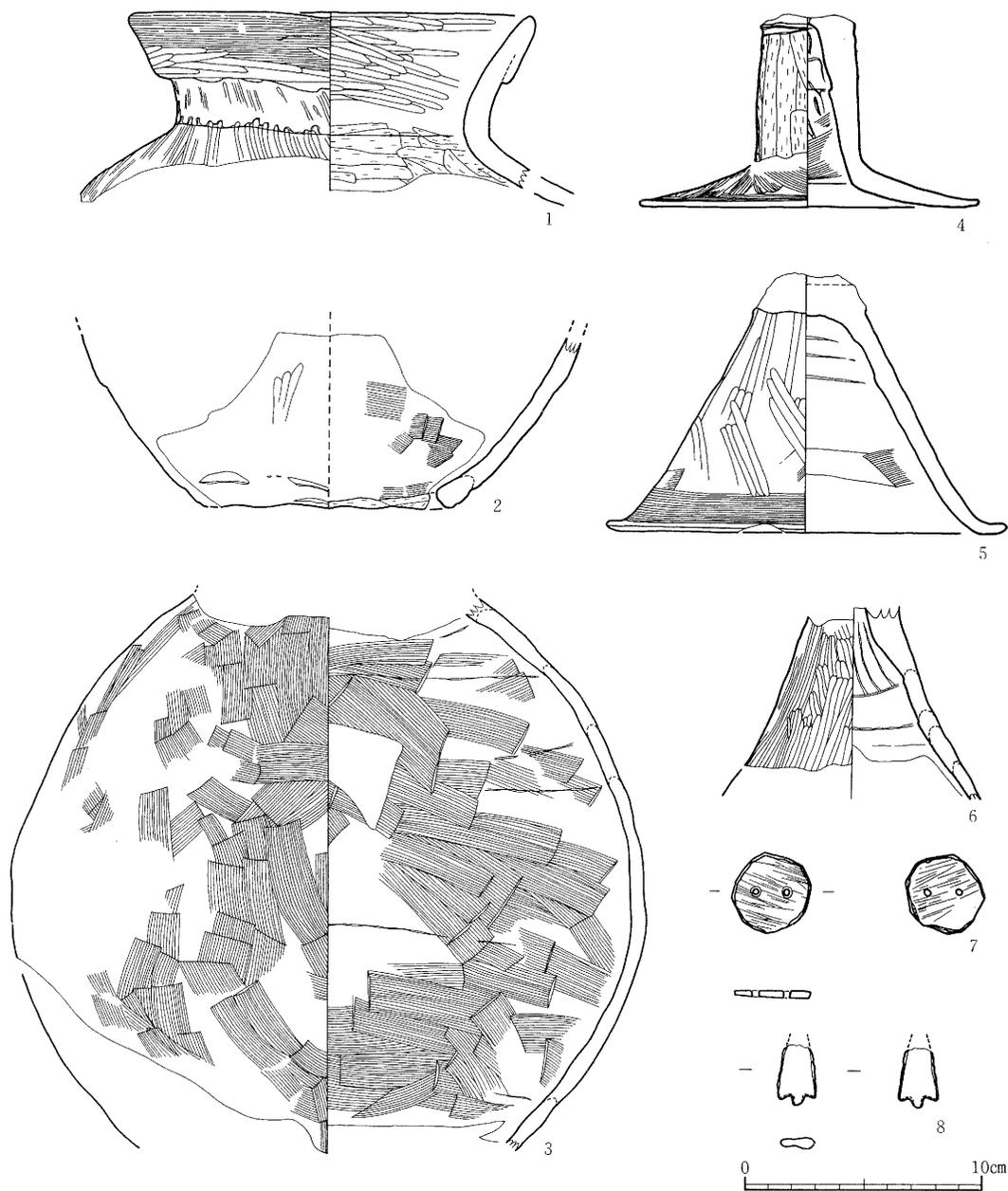
[平面形・規模・方向] 住居跡南壁と東壁の一部を検出したのみで、全体の形状・規模は不明である。東西長1.7m以上、南北長4.5m以上を計る。東壁の方向はN-24°Wを計る。

[重複関係] 3号住居跡を切っており、1号住居跡・3号溝跡に切られている。



| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器形 | 出土遺構 | 出土層位 | 外面調整 | | 内面調整 | | 法量 (cm) | | | 残存 | 備考 | 写真図版 |
|----|------|-----|----|------|------|--------------|-------------|-------------|----------|---------|------|-------|----|------|--------|
| | | | | | | 口縁部 | 体部・底部 | 口縁部 | 体部・底部 | 器高 | 口径 | 底径 | | | |
| 1 | C-7 | 土師器 | 甕 | 1住 | 床面 | ヨコナデ | ヘラナデ後ヘラケズリ | ヨコナデ | ヘラナデ | (8.7) | 16.0 | | | | 図版16-1 |
| 2 | C-6 | 土師器 | 甕 | 1住 | 床面 | ヨコナデ一部ミガキ・ナデ | ヘラケズリ後ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラナデ | 32.0 | 19.8 | (5.9) | ½ | 二次加熱 | 図版15-6 |
| 3 | C-5 | 土師器 | 甕 | 1住 | 床面 | ヨコナデ | ナデ一部ヘラナデ | ヨコナデ一部ヘラケズリ | ナデ一部ヘラナデ | (20.3) | 14.8 | | ¾ | 二次加熱 | 図版15-3 |
| 4 | C-10 | 土師器 | 埴 | 1住P4 | 底面 | 不明 | ヘラケズリ | 不明 | ヘラナデ | 9.9 | 7.8 | 4.1 | ½ | | 図版16-3 |
| 5 | C-1 | 土師器 | 坏 | 1住P4 | 底面 | ヨコナデ | ヘラケズリ後ヘラミガキ | ヨコナデ | ヨコナデヘラナデ | 10.9 | 10.6 | 4.0 | 完形 | 丹塗り | 図版15-1 |

第8図 1号住居跡出土遺物実測図



| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器形 | 出土遺構 | 出土層位 | 外面調整 | | 内面調整 | | 法量 (cm) | | | 残存 | 備考 | 写真図版 |
|----|------|-------|---------|---------|--------|-----------------------|-----------------|--------------|----------------|---------|---------|------|----|---------|--------|
| | | | | | | 口縁部 ヨコナデ 後ヘラミガキ | 体部・底部 ヘラミガキ | 口縁部 ヘラミガキ | 体部・底部 ヘラクスリ | 器高 | 口径 | 底径 | | | |
| 1 | C-9 | 土師器 | 壺 | 1 住 | 床 面 | | | | | (7.7) | 16.7 | | | | 図版16-2 |
| 2 | C-11 | 土師器 | 甌 | 1 住 | 床 面 | | | | | | | | | | |
| 3 | C-8 | 土師器 | 甕 | 1 住 P 2 | 3 層中 | | ヘラナデ | | ヘラナデ | | | | | 二次加熱 | 図版16-4 |
| 4 | C-3 | 土師器 | 高坏 | 1 住 | 床 面 | | ヘラクスリ→ヘラナデ・ヨコナデ | | シボリ目→ヘラナデ | | | | | | 図版15-4 |
| 5 | C-4 | 土師器 | 高坏 | 1 住 P 4 | 底 面 | | ヘラナデ後ヘラミガキ、ヨコナデ | | ヘラクスリ→ヘラナデ | (11.1) | | 16.4 | | | 図版15-5 |
| 6 | C-2 | 土師器 | 高坏 | 1 住 | 床 面 | | ヘラミガキ | | 指ナデ | | | | | | 図版15-2 |
| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器形 | 出土遺構 | 出土層位 | 調整 | 法量 (cm) | | | 石質 | 残存 | 写真図版 | | | |
| | | | | | | | 長さ | 器厚 | 孔径 | | | | | | |
| 7 | K-1 | 石製模造品 | 有孔円板 | 1 住 P 5 | 2 a 層上 | 擦 | 痕 | 3.3 | 0.3 | 0.3~0.4 | 結晶片岩 | 完形 | | 図版 16-6 | |
| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器種 | 出土遺構 | 出土層位 | 法量 (cm) | | | 残存 | 写真図版 | | | | | |
| | | | | | | 残存長 | 幅 | | | | | | | | |
| 8 | N-1 | 鉄製品 | 鉄鑊(平根式) | 1 住 P 5 | 1 層中 | 2.5 | 1.6 | | | | 図版 16-7 | | | | |

第9図 1号住居跡出土遺物実測図

〔堆積土〕 深さ3～15cmで2層に細分される。第1層はにぶい黄橙色シルト層で、住居跡北側を除き分布している。浅黄色シルトをブロック状に含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。第2層は褐灰色シルト層で、住居跡全体に分布し、薄く堆積している。

〔壁・床面〕 壁は1号住居跡から、東壁北端で25cm、南壁で10cm前後内側で検出された。壁高は7～13cmを計り、壁の立ち上がりは70°～90°である。床面は層厚2～5cmのにぶい黄橙色でしまりの強い粘土質シルトによる貼床で、ほぼ平坦である。貼床上面には、全面にわたって灰状の細かい炭化物の分布が認められる。

〔柱穴〕 床面でピットを1基検出したが、住居跡全体の規模も不明なため、柱穴と断定できるものはなかった。

〔カマド〕 東壁やや南寄り、南東コーナーから約1.8mの位置で検出された。この位置は、1号住居跡カマドとほぼ重複している。煙道部のみ遺存しているが、袖部は1号住居跡及び3号溝跡に切れ、全体の規模は不明である。煙道は長さ40cm、幅25～30cmを計り、約25°の角度で立ち上がっている。カマド主軸方向はN-78°Eで、壁方向から南側に約10°のずれがある。燃焼部底面は黒褐色を呈し焼けているが、しまりはない。

〔その他の施設〕 貼床上面、カマド右脇でピットを1基（P1）検出した。1号住居跡P2に切られている。長径65cm、短径60cm、深さ59cmを計り、楕円形を呈する。堆積土は大別3層で、5層に細分される。1a層は黒褐色の粘土質シルト層、1b層は暗オリーブ褐色の粘土質シルト層、1c層はにぶい黄橙色の粘土質シルト層で、ともに炭化物を斑状に含む。2層は明黄褐色の粘土質シルト層で、にぶい黄褐色シルトをブロック状に含み、人為的に埋められた様相を呈する。3層は褐灰色のシルト層で、炭化物・灰を多量に含む。貯蔵穴と考えられる。

〔遺物出土状況〕 堆積土1層中より土師器片21点、床面直上の炭化層上面から土師器片14点が出土している。実測可能な遺物は1点もない。

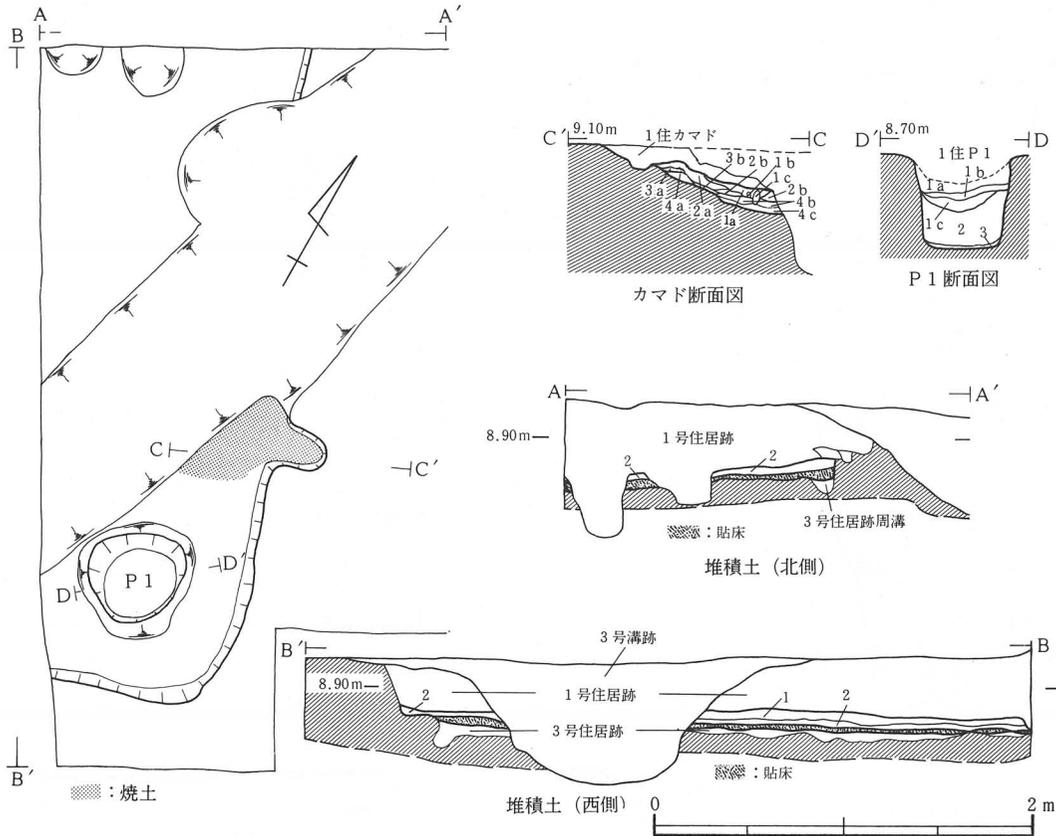
第3表 2号住居跡出土遺物集計表

| 出土層位 | 1層 | | | 2層 出土遺物なし | 床面直上 (炭化層) | | | 床面 出土遺物なし | P1 出土遺物なし | 計 |
|-------|-----|----|----|--------------|---------------|----|---|--------------|--------------|----|
| | 土師器 | | | | 土師器 | | | | | |
| 器種 | 坏 | 高坏 | 甕類 | 坏 | 高坏 | 甕類 | | | | |
| 個体破片数 | 1 | 10 | 10 | | 6 | 1 | 7 | | | 35 |
| 実測点数 | | | | | | | | | | 0 |

(3) 3号住居跡

A・B-1区、2号住居跡貼床直下で検出された（第11図）。

〔平面形・規模・方向〕 住居跡南壁と東壁の一部を検出したのみで、全体の形状・規模は不明である。東西長1.8m以下、南北長4.3以上を計る。東壁の方向はN-15°～20°-Wを計る。



堆積土

| 層No | 土色 | 土性 | その他 |
|-----|--------------|--------|--|
| 1 | 10YR 8/1 黄褐色 | シルト | 2.5Y 7/1 浅黄色シルトをブロック状に含む 土師器片出土、焼土を少量含む |
| 2 | 10YR 8/2 灰褐色 | シルト | 焼土を斑状に少量含む |
| 貼床 | 10YR 8/1 黄褐色 | 粘土質シルト | 土師器片出土、黒色炭化物をうすくのせる 焼土及び炭化物を多量に含む |

ピット

| 層No | 土色 | 土性 | その他 |
|-----|---------------|------------------|---------------------------------------|
| P1 | 1a | 2.5Y 7/1 黒褐色 | 粘土質シルト 炭化物を斑状に含む |
| | 1b | 2.5Y 7/2 暗オリーブ褐色 | 粘土質シルト 炭化物を斑状に含む |
| | 1c | 10YR 8/1 黄褐色 | 粘土質シルト 炭化物を斑状に含む |
| 2 | 10YR 8/2 明黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR 8/1 に近い黄褐色シルトをブロック状に含む、炭化物を斑状に含む |
| 3 | 10YR 8/2 灰褐色 | シルト | 炭化物・灰を多量に含む |

カマド

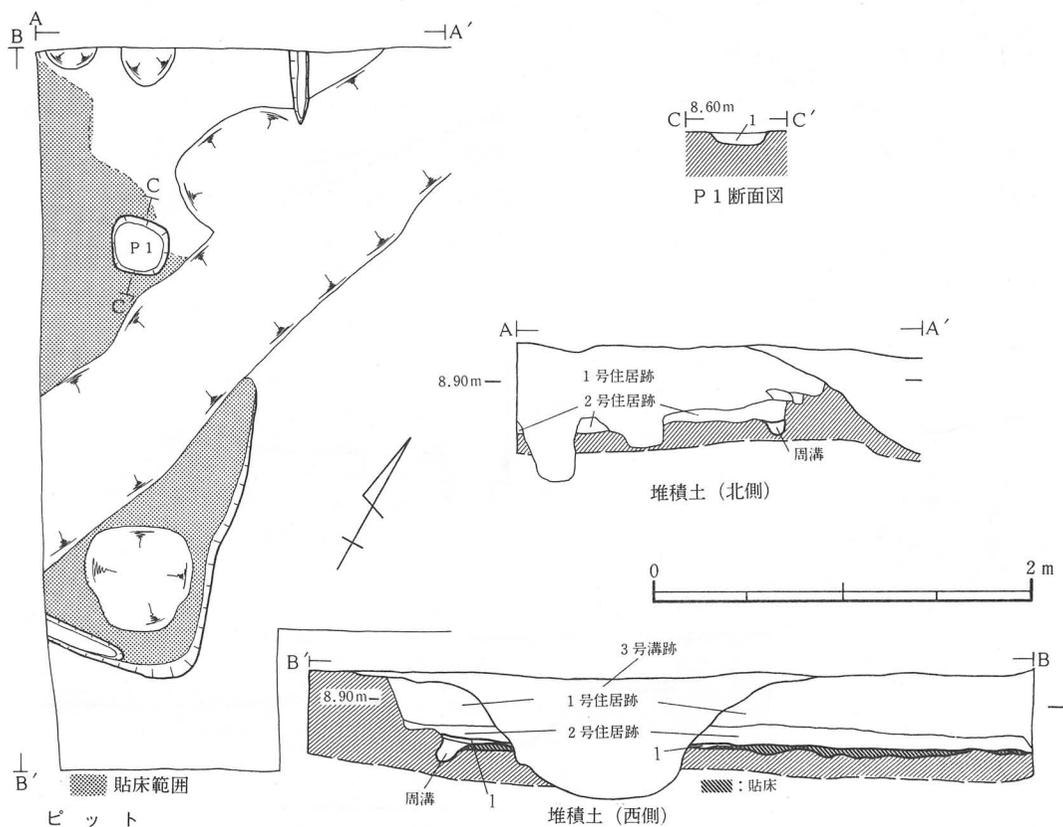
| 層No | 土色 | 土性 | その他 |
|-----|----------------|--------|----------------|
| 1a | 10YR 8/1 黄褐色 | シルト | 焼土をブロック状に含む |
| 1b | 10YR 8/2 灰褐色 | 粘土 | |
| 1c | 10YR 8/2 褐色 | シルト | 焼土・灰を多量に含む |
| 2a | 10YR 8/3 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土・灰を多量に含む |
| 2b | 10YR 8/2 灰黄褐色 | シルト | |
| 3a | 7.5YR 8/3 極暗褐色 | シルト | 焼土 |
| 3b | 10YR 8/1 黄褐色 | 粘土質シルト | |
| 4a | 10YR 8/3 黒褐色 | シルト | 焼土粒・灰を多量に含む |
| 4b | 7.5YR 8/3 暗褐色 | シルト | 焼土・炭化物を多量に含む |
| 4c | 7.5YR 8/3 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物を斑状に含む |

第10図 2号住居跡平面図・断面図

〔重複関係〕 1・2号住居跡、3号溝跡に切られている。

〔堆積土〕 深さ2cmで1層である。灰黄褐色シルトで、住居跡南壁付近にのみ分布している。層中に焼土・炭化物を多量に含む。

〔壁・床面〕 壁は2号住居跡から、東壁で8～30cm、南壁で16～20cm内側で検出された。壁高は9～18cmを計り、壁の立ち上がりはほぼ直角に近い。床面は層厚3～7cmの浅黄色のし



| 層No | 土 色 | 土 性 | そ の 他 |
|-----|-----------------|--------|--------------------|
| P 1 | 10Y R 7/2 暗 褐 色 | 粘土質シルト | 焼土粒・灰を多量に含む、土師器片出土 |

堆 積 土

| 層No | 土 色 | 土 性 | そ の 他 |
|-----|-------------------|--------|---------------|
| 1 | 10Y R 7/2 灰 黄 褐 色 | シルト | 焼土及び炭化物を多量に含む |
| 貼床 | 2.5Y 7/2 浅 黄 色 | 粘土質シルト | 土師器片出土、しまり強し |
| 周溝 | 10Y R 7/2 ぶい黄橙色 | 粘土質シルト | 粘性強し |

第11図 3号住居跡平面図・断面図

まりの強い粘土質シルトによる貼床で、住居跡北側を除き施されている。床面は北側がやや高くなっているが、ほぼ平坦である。

〔周溝〕南壁及び東壁北部の直下で検出された。断面形は「U」字形で、上端幅6～12cm、底面幅5～10cm、深さ10～18cmを計る。

〔柱穴〕床面でピットを1基検出したが、住居跡全体の規模も不明なため、柱穴と断定できるものはなかった。

〔カマド〕床面での焼土炭化物等の分布は認められず、不明である。

〔その他の施設〕住居跡床面で、ピットを1基（P 1）検出した。長軸40cm、短軸36cm、深さ6cmを計り、隅丸方形を呈する。堆積土は1層で、暗褐色の粘土質シルトである。

〔遺物出土状況〕床面で土師器片12点、P 1 から土師器片20点が出土している。実測可能な遺物は1点もない。

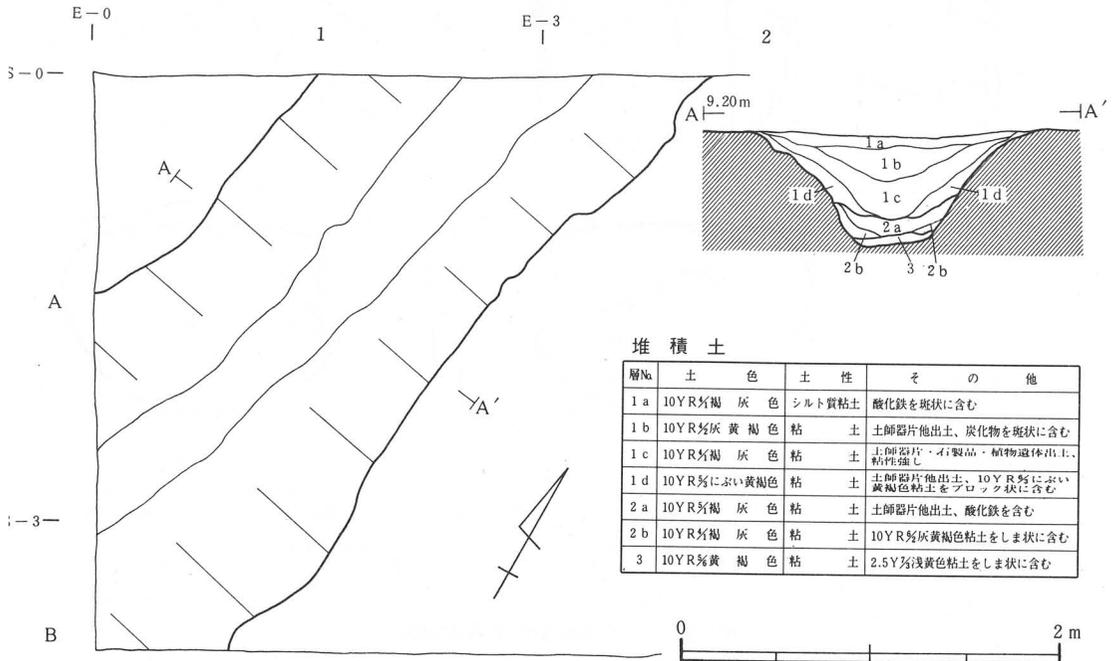
第4表 3号住居跡出土遺物集計表

| 出土層位 | 1層 | 床 面 | | | P 1 | | | 計 |
|-------|--------|-------|----|----|-------|----|----|----|
| 種 別 | 出土遺物なし | 土 師 器 | | | 土 師 器 | | | |
| 器 種 | | 环 | 高环 | 甕類 | 环 | 高环 | 甕類 | |
| 個体破片数 | | | 7 | 2 | 3 | 4 | 3 | 13 |
| 実測点数 | | | | | | | | 0 |

(4) 3 号 溝 跡

A-2区からB-1区にかけて、長さ5mにわたって検出された(第12図)。1・2・3号住居跡を切っている。上端幅1.8~2.3m、底面幅34~58cm、深さ67~80cmを計り、断面形は「U」字形である。方向はN-10°Eを計り、ほぼ真北である。底面のレベルは、北側から南側にかけて低くなっており、レベル差は12cmを計る。堆積土は大別3層で、7層に細分される。全て粘土層である。1a層は褐灰色シルト質粘土層、1b層は灰黄褐色粘土層、1c層は褐灰色粘土層で粘性が強い。1d層はにぶい黄褐色粘土層で、地山崩壊土である。2a層は褐灰色粘土層で、酸化鉄を含む。2b層は褐灰色粘土層で、灰黄褐色土を含み地山崩壊土である。3層は黄褐色粘土層で、グライ化が著しい。

〔遺物出土状況〕1a・2b・3層を除く堆積土各層から出土している。1b層：土師器片148点・鉄製品1点・鉄滓2点・礫26点、1c層：土師器片35点・石製品1点・礫2点、1d層：土師器片



第12図 3号溝跡平面図・断面図

27点・石器2点・礫4点、2a層：土師器片1点・礫2点である。また、1c層中からは炭化した植物遺体が出土している。この内、実測可能な遺物は、石製品（K-4）1点、石器（K-2・3）2点のみである。尚、出土遺物中で土師器片は全て非ロクロである。

〔出土遺物〕（第13図）

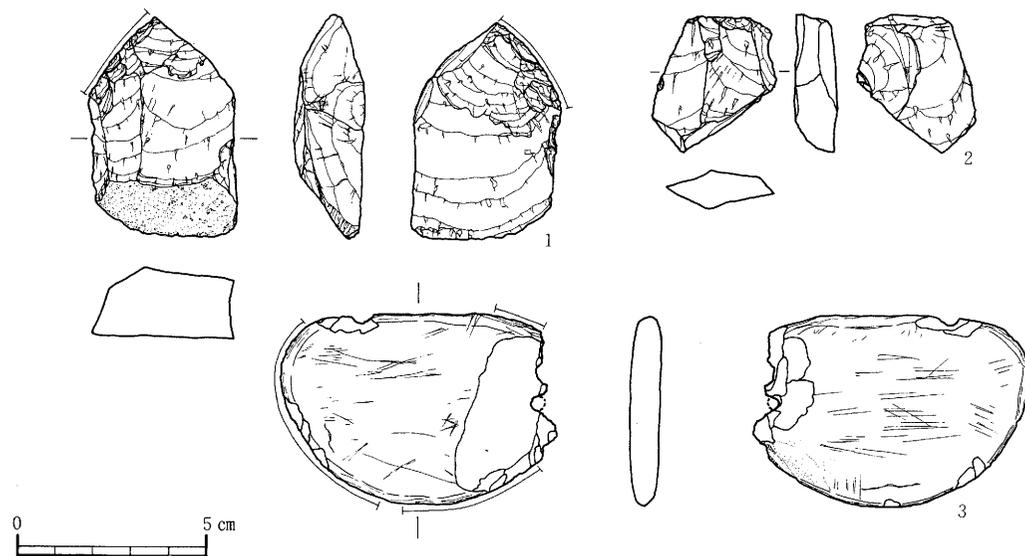
石器K-2（第13図-1）：堆積土1d層中より出土した。二次加工のある剥片である。表面左上側辺が刃部として使用されたらしく、微細剥離痕が認められる。流紋岩製。

石器K-3（第13図-2）：堆積土1d層中より出土した。二次加工のある剥片である。流紋岩製。

石製品K-4（第13図-3）：堆積土1c層中より出土した。孔が表裏両面から穿たれており、縁辺の大部分には敲打痕が認められる。石包丁未製品と考えられる。粘板岩製。

第5表 3号溝跡出土遺物集計表

| 出土層位 | 1a層 | 1b層 | | | | | 1c層 | | | | | 1d層 | | | 2a層 | 2b層 | 3層 | 計 | | | |
|------|--------|-----|----|----|-----|----|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|---|----|--------|--------|
| 種別 | 出土遺物なし | 土師器 | | | 鉄製品 | 鉄滓 | 礫 | 土師器 | | | 鉄製品 | 礫 | 土師器 | | 石器 | 礫 | 土師器 | | 礫 | 出土遺物なし | 出土遺物なし |
| 器種 | | 坏 | 高坏 | 甕類 | | | | 坏 | 高坏 | 甕類 | | | | 坏 | 甕類 | | | 坏 | 甕類 | | |
| 個破片数 | | 80 | 12 | 56 | 1 | 2 | 26 | 16 | 3 | 17 | 1 | 2 | 25 | 2 | 2 | 1 | 1 | 2 | | | 249 |
| 実測点数 | | | | | | | | | | | 1 | | | 2 | | | | | | | 3 |

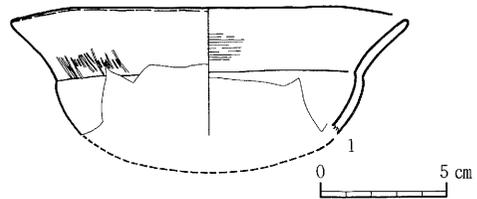


| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器種 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重さ (g) | 打面 | | 石材 | 備考 | 写真図版 |
|----|------|------|------|------------|-----------|------------|-----------|------|-----|-----|----------------|---------|
| | | | | | | | | 幅 | 厚さ | | | |
| 1 | K-2 | 打製石器 | 剥片 | 58 | 37.3 | 16.8 | 44.5 | — | — | 流紋岩 | 側辺微細剥離痕・打面二次加工 | 図版16-8 |
| 2 | K-3 | 打製石器 | 剥片 | 34.7 | 32.7 | 10.2 | 10.35 | 22.7 | 7.1 | 流紋岩 | 裏面二次加工 | 図版16-9 |
| 3 | K-4 | 石製品 | 石包丁? | 73.4 | 50.5 | 8.5 | 51.5 | — | — | 粘板岩 | 縁辺に敲打痕 | 図版16-10 |

第13図 3号溝跡出土遺物実測図

(5) 遺構外出土遺物

坏C-12（第14図）：A-2区4a層上面より出土した。体部は丸みをもち、口縁部は屈曲し外反する。内面に綾線を形成する。底部を欠損しているが、丸底状を呈すると考えられる。調整は磨滅が著しいが、口縁部外面に一部ハケメ、内面に一部ヨコナデが施されている。



| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器形 | 出土地区 | 出土層位 | 外面調整 | | 内面調整 | | 法量 (cm) | | | 残存 | 写真図版 |
|----|------|-----|----|------|------|------|----|------|----|---------|------|----|------|--------|
| | | | | | | 口縁部 | 体部 | 口縁部 | 体部 | 器高 | 口径 | 底径 | | |
| 1 | C-12 | 土師器 | 坏 | A-2 | 4a層上 | ハケメ | 不明 | ヨコナデ | 不明 | (5.1) | 15.8 | | 底部欠損 | 図版16-5 |

第14図 A-2区4a層上面出土坏実測図

Ⅶ 考察とまとめ

今回の発掘調査は、調査個所や面積等の関係から、検出した遺構の全容を明らかにすることができなかったが、約30㎡の中で2度の改築・拡張を伴う3時期にわたる竪穴住居跡1軒、溝跡3条を検出した。本章では検出された住居跡について、その構造の変遷を辿るとともに、出土遺物について若干の検討を行いたい。

1. 竪穴住居跡

検出された3軒の住居跡は、2度の改築・拡張を伴う3時期にわたる住居跡である。全体の形状・規模は不明であるが、検出された範囲の中で次のような変遷が認められる。

3号住居跡→2号住居跡

〔壁〕 2号住居跡は、3号住居跡より南壁で15～20cm、東壁で15～27cm拡張されている。

〔床面〕 2号住居跡貼床は、3号住居跡の貼床直上に施設されている。

2号住居跡→1号住居跡

〔壁〕 1号住居跡は、2号住居跡より南壁で10cm、東壁で0～25cm拡張されている。

〔床面〕 1号住居跡貼床は、2号住居跡の床面上に人為的に地山の浅黄色シルトとにぶい黄褐色シルトの混合土を入れ、その上に施設されている。

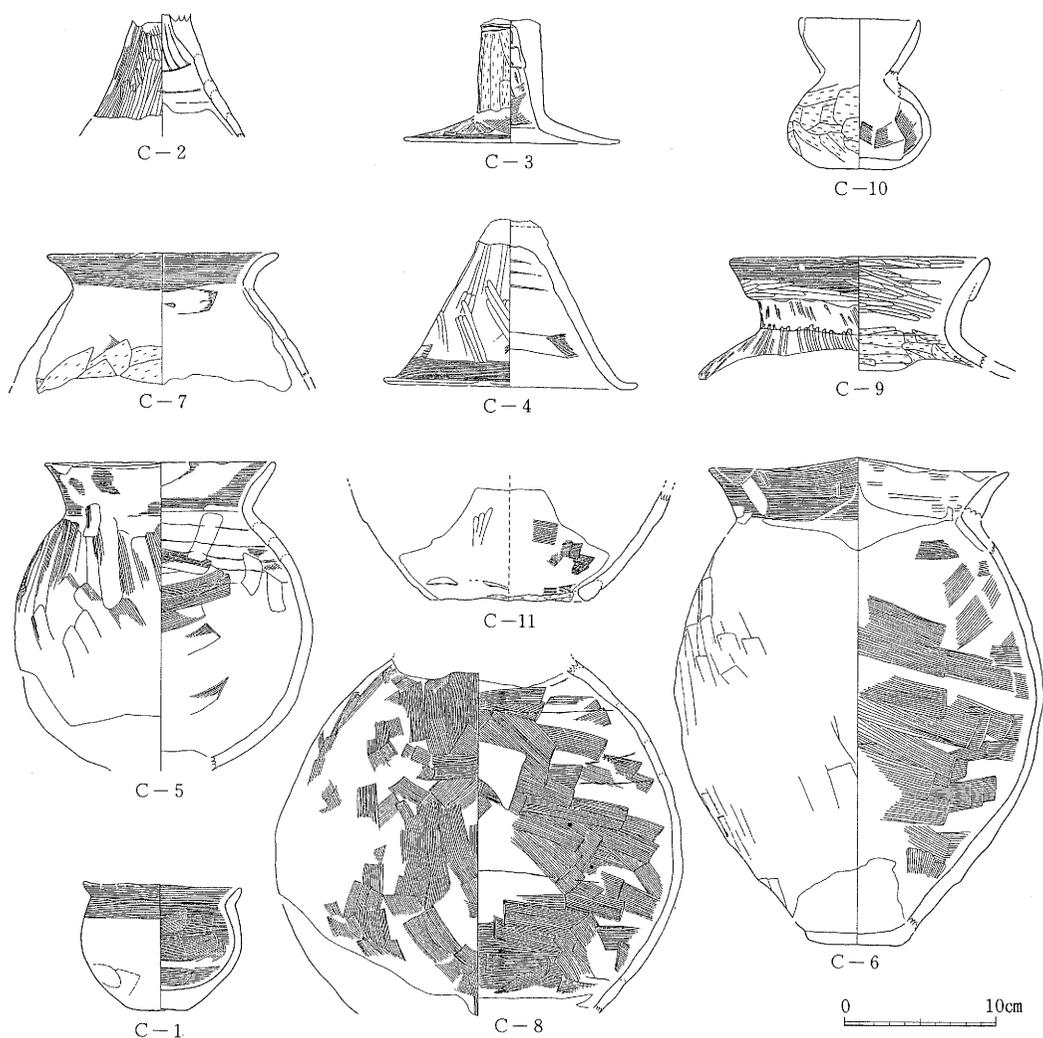
〔カマド〕 1・2号住居跡とも、ほぼ同位置に構築されている。共に全体の規模は不明であるが、煙道部は1号住居跡が6°のずれをもって構築されている。

〔ピット〕 1号住居跡P2は、同位置で2号住居跡P1を切っている。また、2号住居跡P1堆積土には、にぶい黄褐色シルトと明黄褐色粘土質シルトの混合土があり、人為的に埋め戻されていると考えられる。

2. 出土遺物

床面上からの出土遺物は、1号住居跡のものが大半を占め、2・3号住居跡からは小破片のみの出土であった。ここでは、この最終段階である1号住居跡床面出土土器についての検討を試みたい（第15図）。

1号住居跡床面出土の土器には、土師器環・高坏・甕・壺・埴・甑があり、その他に石製模造品（有孔円板）・鉄鏃が出土している。各器種の概略は以下の通りである。坏C-1は平底の坏で、体部は丸みを持ち、口縁部が屈曲し短かく立ち上がる。口縁部内面に綾線を形成する。高坏C-2は、脚部が円錐台状に開く。高坏C-3は、柱状部が中空でやや脹みを持ち、裾部が大きく外方に開く。高坏C-4は、裾部が円錐台状に開き、裾端部が屈曲する。甕C-5は、体部が丸みを持ち口縁部が外反し、最大径を体部中央にもつ。甕C-6は、体部がやや長胴形



第15図 1号住居跡出土土器

の脹みをもち口縁部が外反し、最大径を体部中央にもつ。甕C-7は、体部がゆるやかな丸みをもち、口縁部が外反する。甕C-8は、体部が球形を呈する。壺C-9は、頸部が外傾し折り返し口縁をもつ。埴C-10は、平底状の丸底で体部が丸みをもち、口縁高と体部高、口縁径と体部径がほぼ等しい。甗C-11は、無底で大型の甗片である。

これらの特徴を有する土師器は、氏家和典氏によれば(註6)、「第二型式土器」即ち南小泉式に位置づけられる。その器形の特徴は、(1)大形の壺形土器においては、球形の体部に短かく外反する口縁部をもち、最大径が体部中央にある。(2)小形・中形の壺形土器においては、丸底を呈し、口縁高と体部高、口縁径と体部径がほぼ等しい。(3)高坏形土器においては、脚部は中脹み中空で、裾部は脚柱部より顕著に外方に屈折し広がった裾部を形成する。脚中央部に窓を有しない。(4)甕形土器においては、細長い体部に単調で外反する口縁部をもち、頸部に段を有しない。最大径が体部中央にある。(5)甗形土器においては、円錐形状を呈する複合口縁のもの及び無底で深鉢形のものが存在する、とされている。

これらの特徴は、高坏C-3、甕C-5・6・7・8、埴C-10、甗C-11にあたるものであり、南小泉式期のもと考えられるが、坏C-1、壺C-9はむしろ前段階に位置づけられる塩釜式の特徴を備えるものである。個体数からみれば、南小泉式期の方が多く、古い型式の属性は新しい型式の中にも残るが、新しい型式の属性は古い型式の中ではみられないとする原則からすれば、これらの土器群は、全体として南小泉式期のもものとみておきたい。また、これらの土器と共伴して出土した石製模造品(有孔円板)K-1、鉄鏃N-1も同時期のものとみられる。

次に、各土器を県内の他遺跡出土の土器と比較検討してみたい。各器種の類例は以下の通りである。坏C-1は、仙台市中田畑中遺跡・坏AⅠ-1類(註7)、刈田郡蔵王町大橋遺跡・坏Ⅰ-A3類(註8)と類似する。高坏C-2は、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡・高坏脚部Ⅱ類(註9)と類似する。高坏C-3は、岩切鴻ノ巣遺跡・高坏DⅠ類、多賀城市山王遺跡・高坏Ⅲ類(註10)と類似する。高坏C-4は、岩切鴻ノ巣遺跡・高坏DⅡ類・高坏脚部Ⅱ類と類似する。甕C-5は、山王遺跡・甕Ⅱb類と類似する。甕C-6は、岩切鴻ノ巣遺跡・甕BⅡ類、山王遺跡・甕Ⅱa類と類似する。甕C-7は、岩切鴻ノ巣遺跡・甕BⅡ類、亶理郡亶理町宮前遺跡・甕第1類(註11)と類似する。壺C-9は、大橋遺跡・壺A2b類と類似する。甗C-11は、全体の器形は不明であるが、岩切鴻ノ巣遺跡・甗AⅠ、AⅡ類に類似するものと思われる。

これらの中で、高坏C-2・3・4、甕C-5・6・7、埴C-10、甗C-11と類似する各遺跡の土器は、いずれも南小泉式とされており、坏C-1・壺C-9と類似する土器は塩釜式とされている。このように両型式の特徴をもつ土器が混在しているが、南小泉式期のものが主的存在を示しているという点は、先の検討の通りである。

それでは、この土器群は南小泉式期中でどのように位置づけられるかという点について、塩釜式・南小泉式両型式の土器組成の上から検討してみたい。塩釜式の土器が一括して出土する県内の遺跡には、大橋遺跡の他に名取市西野田遺跡（註13）、古川市留沼遺跡（註14）などがある。ここでは、坏C-1・壺C-9と類似する土器を出土している大橋遺跡との検討を行いたい。坏C-1は、大橋遺跡3号住居跡出土の坏I-A3類に類似し、壺C-9は大橋遺跡1号住居跡出土の壺A2b類に類似するものである。これら各住居跡出土の土器群は、坏・高坏・器台・甕・壺・徳利形土器から成るが、この土器群の中に坏C-1・壺C-9と類似する土器が含まれていることから、本住居跡出土の坏C-1・壺C-9は塩釜式の特徴を備えているとみて大過ないと思われる。南小泉式の土器が一括して出土する県内の遺跡には、本遺跡の他、岩切鴻ノ巣遺跡、宮前遺跡、山王遺跡などがある。高坏C-2・3・4、甕C-6・7、埴C-10、甗C-11と類似性が認められる岩切鴻ノ巣遺跡1・2号住居跡出土の土器群は、坏・高坏・甕・壺・甗から成り、土器組成の上で本住居跡と同一である。高坏C-3、甕C-5・6と類似性が認められる山王遺跡3号遺構出土の土器群は、坏・高坏・甕・壺から成り、本住居跡と比較し甗を欠いている。甕C-7と類似性が認められる宮前遺跡45号住居跡出土の土器群は、坏・甕・壺・甗から成り、本住居跡と比較し高坏を欠いている。以上の検討から、本住居跡出土の土器群は、岩切鴻ノ巣遺跡1・2号住居跡出土の土器群と強い類似性のあることがうかがえる。

以上、本住居跡出土の土器群は、塩釜式・南小泉式両時期の特徴を備えているが、主体を成すのは南小泉式の特徴をもつ土器であり、塩釜式の特徴をもつ土器は客体を成す存在としてとらえられよう。これらのことから、塩釜式から南小泉式への土器組成の変遷が、必ずしも現段階では明確になっていないものの、ここでは、本住居跡出土の土器群を南小泉式の古い段階に位置づけておきたい（註15）。

県内で南小泉式の土器を出土し、カマドを備える住居跡としては、南小泉遺跡第6次調査3号住居跡、岩切鴻ノ巣遺跡1・2号住居跡、宮前遺跡8・25・42号住居跡の報告がある（註16）。岩切鴻ノ巣遺跡1・2号住居跡の土器組成は既述の通りである。本遺跡第6次調査3号住居跡出土の土器群は、坏・高坏・甕・壺から成り、本住居跡と比較し甗を欠いている。一方、宮前遺跡8号住居跡出土のは、坏・甕・壺、同25号住居跡出土のは坏・高坏・甕・壺、同42号住居跡のは坏・高坏・壺から成り、各々、高坏・甗、甗、甕・甗を欠いている。これら各住居跡出土の土器群の中には、本住居跡出土の土器群にみられる坏C-1・壺C-9などの塩釜式の特徴を有する土器の共伴例がないことから、本住居跡はカマド出現の初現的な様相を呈しているものと考えられる。

3. その他の遺構と遺物

溝跡は調査区内で3条検出された。

2a層上面で検出された1・2号溝跡は、時期不明であるが、水田耕作に関わるものと考えられる。3号溝跡は、4a層上面で検出された。1・2・3号住居跡を切っているが、堆積土上層からの出土遺物の中にもロクロ使用の土師器片、須恵器片等が見られないことから、最終埋没時期は奈良時代以前と考えておきたい。

出土遺物には、3号溝跡出土の打製石器・石製品、A-2区4a層上面出土の土師器坏がある。これまでの本遺跡の調査からは弥生土器の出土例が多く報告されており、上記の打製石器・石製品は弥生時代の所産と考えておきたい。土師器坏C-12は、口縁部外面に屈曲をもつこと、内面に綾線を形成すること、外面調整にハケメが認められることなどから、南小泉式の中でも古い段階あるいは塩釜式に属する可能性が考えられる。

本報告書の編集を終えるにあたり、本書のために年度末のお忙しい時期に御寄稿下さいました星川清親氏には、末筆ながら深く感謝申し上げます。また、現地調査から整理作業にわたり御協力いただいた各氏にも感謝の意を表し、報告の終りとします。

註・参考文献

- 註1：地学団体研究会「新編 仙台の地学」～仙台支部編～ 1980
- 註2：仙台市教育委員会「南小泉遺跡範囲確認調査」『仙台市文化財調査報告書第13集』1978・3
- 註3：註2に同じ
- 註4：註2(p.55)
- 註5：仙台市科学館・佐々木隆氏より、結晶片岩の中でも光沢が著しいことから、絹雲母片岩であり、分布地は埼玉県秩父郡長瀬町周辺であるとの御教示をいただいている。
- 註6：氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 1957
- 註7：仙台市教育委員会「中田畑中遺跡」『仙台市文化財調査報告書第53集』 1983・3
- 註8：宮城県教育委員会「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ・大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書第71集』 1980・9
- 註9：宮城県教育委員会「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ・岩切鴻ノ巣遺跡」『宮城県文化財調査報告書第77集』 1981・3
- 註10：多賀城市教育委員会「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書第2集』 1981・3
- 註11：宮城県教育委員会「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第96集』 1983・3
- 註12：仙台市教育委員会「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第60集』 1983・3
- 註13：宮城県教育委員会「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ・西野田遺跡」『註9に同じ』
- 註14：宮城県教育委員会「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ・留沼遺跡」『宮城県文化財調査報告書第65集』 1980・3
- 註15：折り返し口縁を有する壺は、仙台市高速鉄道関係遺跡・下ノ内遺跡の調査(「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ」昭和57年3月)によれば、南小泉式期の新しい段階まで残り得るものがあり、この点については今後検討を要する。

写 真 图 版

図版1
調査区遠景
(南より)



図版2
1・2号溝跡全景
(南東より)

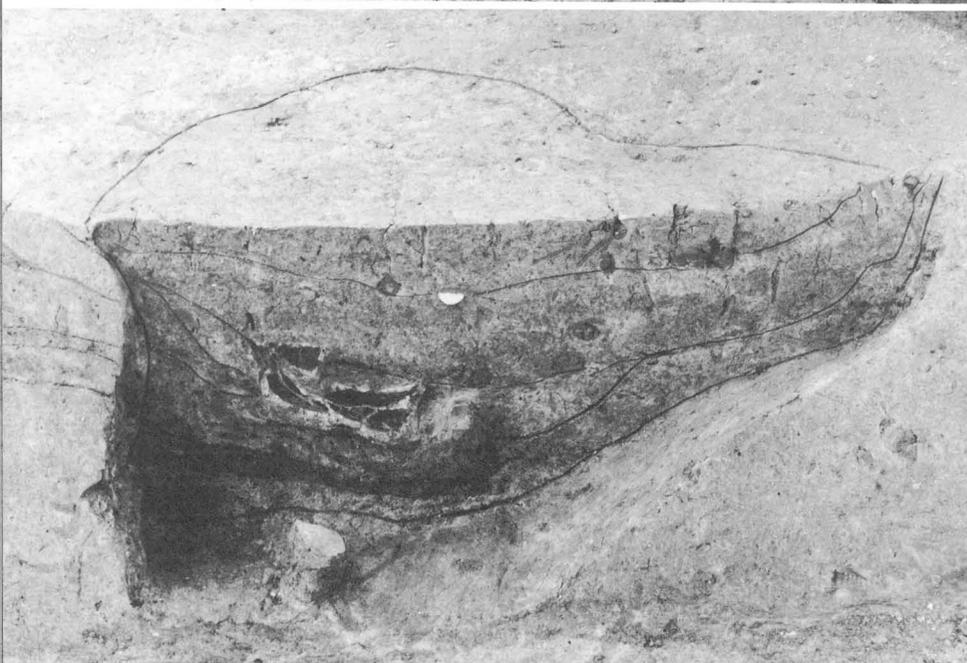


図版3
1号住居跡全景
遺物出土状況
(北東より)

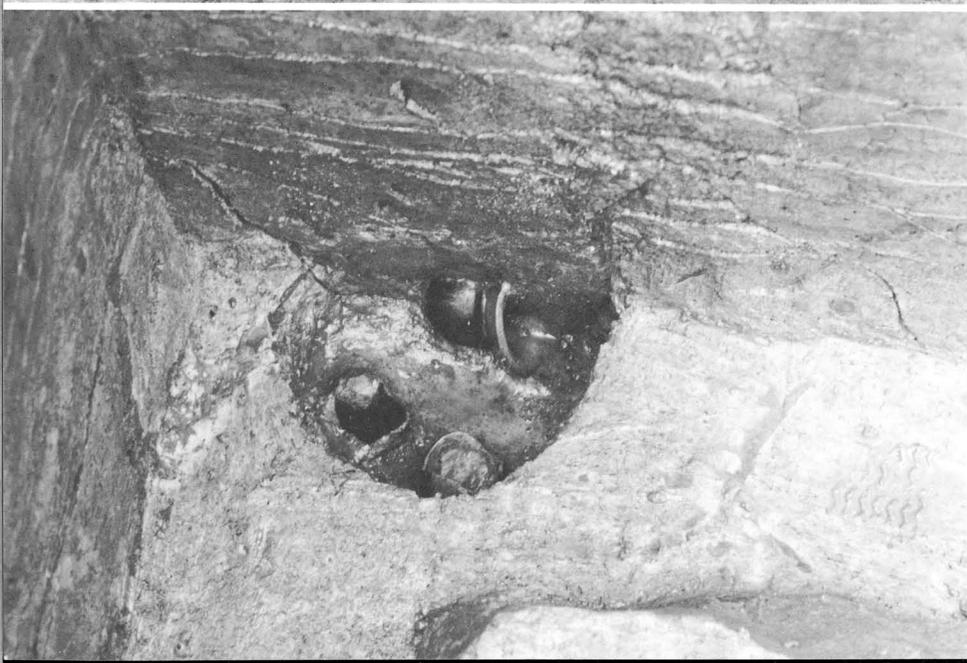




図版4
1号住居跡カマド断面
(北西より)



図版5
1号住居跡P5断面
(東より)



図版6
1号住居跡P4
遺物出土状況
(南東より)

図版 7
1号住居跡完掘状況
(北東より)

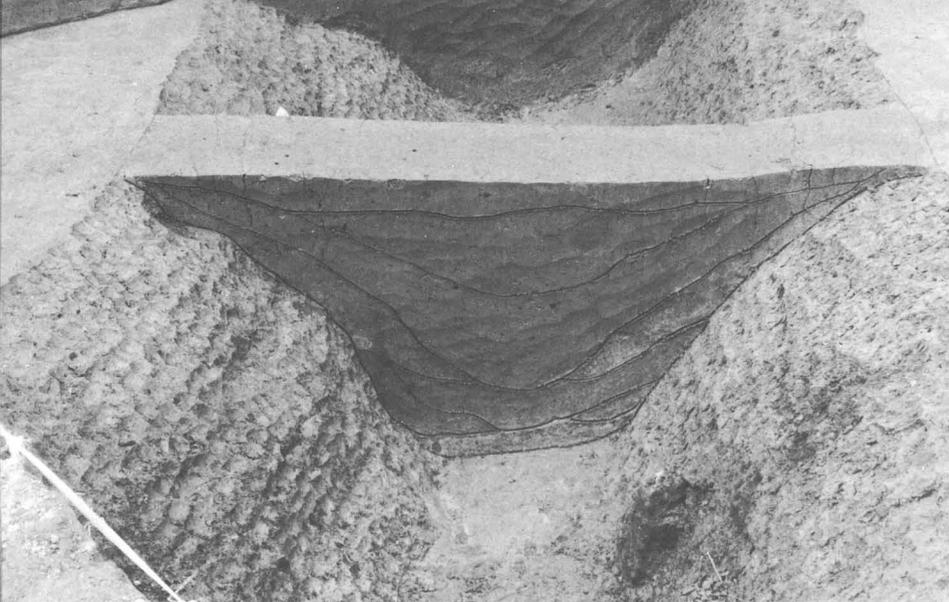


図版 8
2号住居跡カマド断面
(北西より)

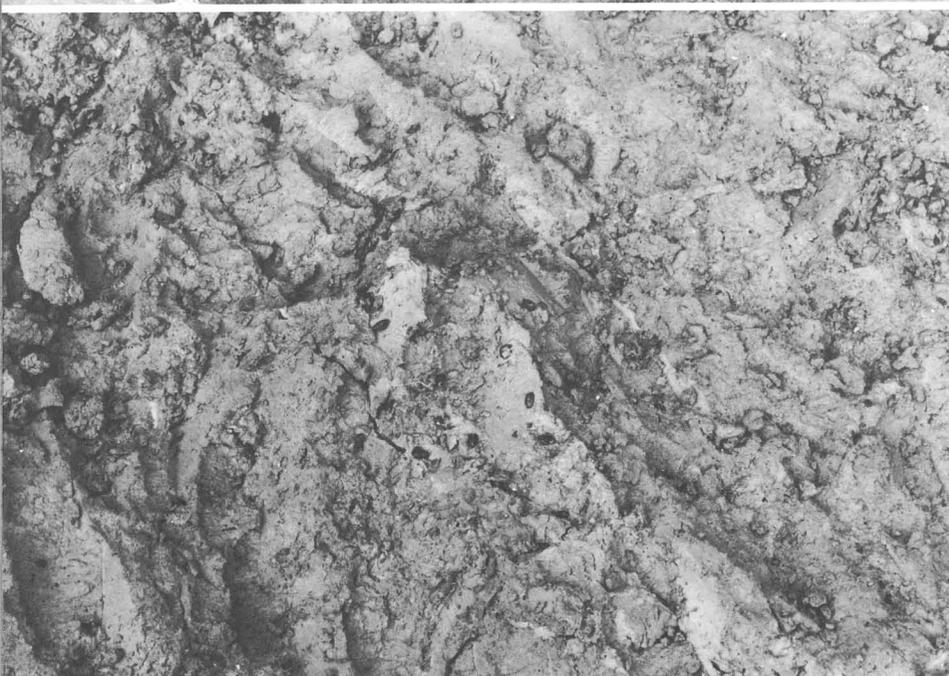


図版 9
3号住居跡全景
(北西より)

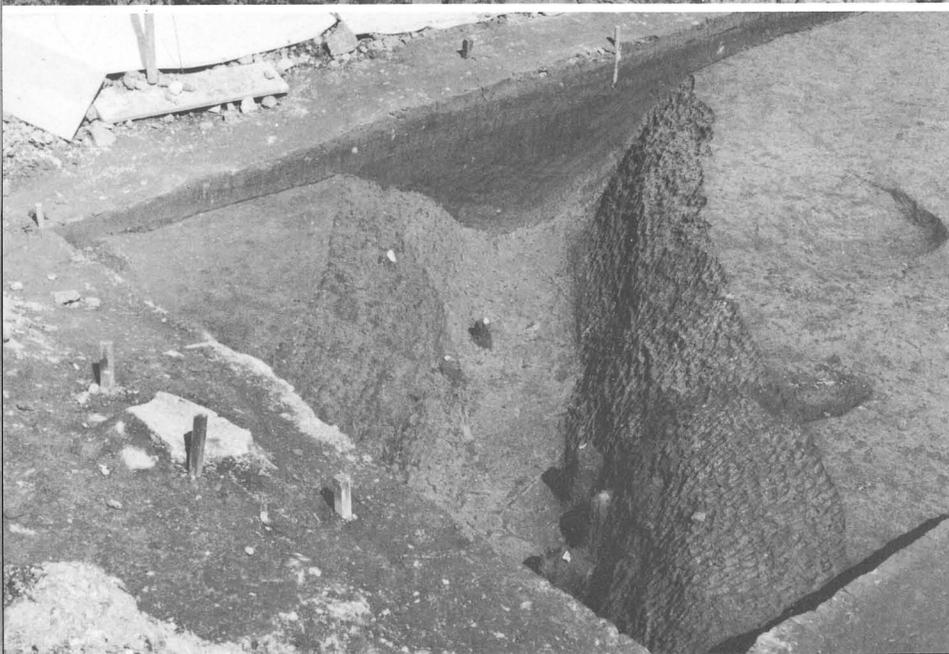




図版10
3号溝跡断面
(南より)



図版11
3号溝跡1C層中
植物遺体出土状況
(東より)



図版12
3号溝跡全景
(南より)

図版13
A-2区4a層上面
坏出土状況
(東より)



図版14
調査区完掘状況
(北より)

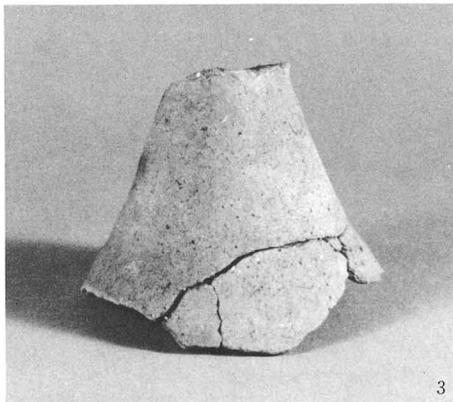




1



2



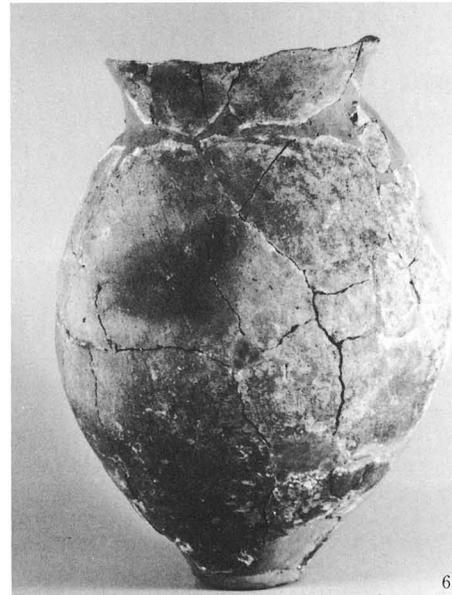
3



4



5

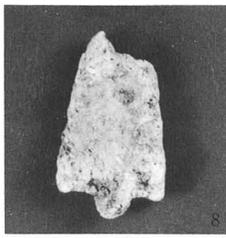
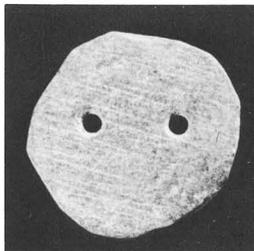
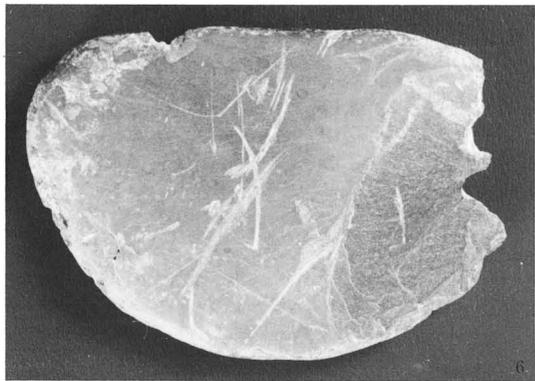
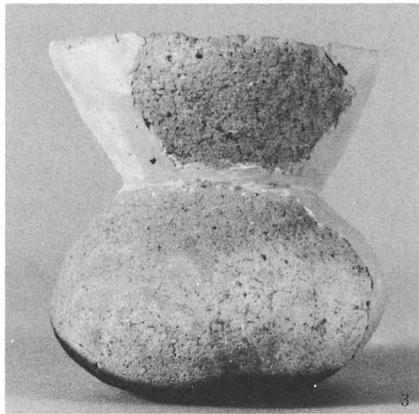
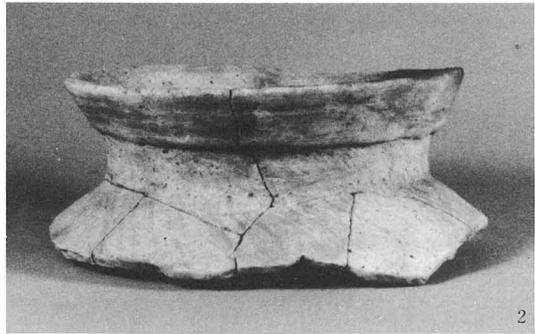
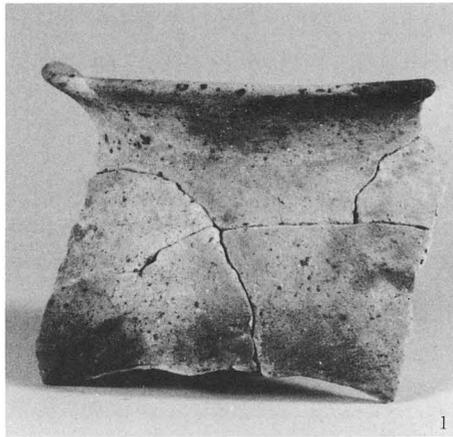


6

1. C-1 土師器 坏 第8图-5
 2. C-3 土師器 高坏 第9图-4
 3. C-2 土師器 高坏 第9图-6

4. C-4 土師器 高杯 第9图-5
 5. C-5 土師器 甗 第8图-3
 6. C-6 土師器 甗 第8图-2

图版15 1号住居跡出土遺物



- 1. C-7 土師器 甕 第8図-1
- 2. C-9 土師器 壺 第9図-1
- 3. C-10 土師器 罎 第8図-4
- 4. C-8 土師器 甕 第9図-3
- 5. C-12 土師器 坏 第14図
- 6. K-4 石製品 第13図-3
- 7. K-1 石製模造品(有孔円板)第9図-7

- 8. N-1 鉄 鏃 第9図-7
- 9. K-2 石 器(剝片) 第13図-1
- 10. K-3 石 器(剝片) 第13図-2

図版16 1号住居跡出土遺物他

南小泉遺跡第13次発掘調査3号溝跡出土植物遺体調査

東北大学農学部教授 星 川 清 親

南小泉遺跡第13次発掘調査3号溝跡の1c層より出土した植物種子を鑑定した結果は下記の表のとおりである。

| 植 物 名 | 粒 数 |
|------------|-----|
| オオムギ (皮麦) | 119 |
| コムギ | 18 |
| イネ (玄米) | 10 |
| リョクトウ* | 4 |
| アズキ | 1 |
| その他不明種子 | 2 |
| 穀 (種不明) 破片 | 1 |

*ヤブツルアズキか？

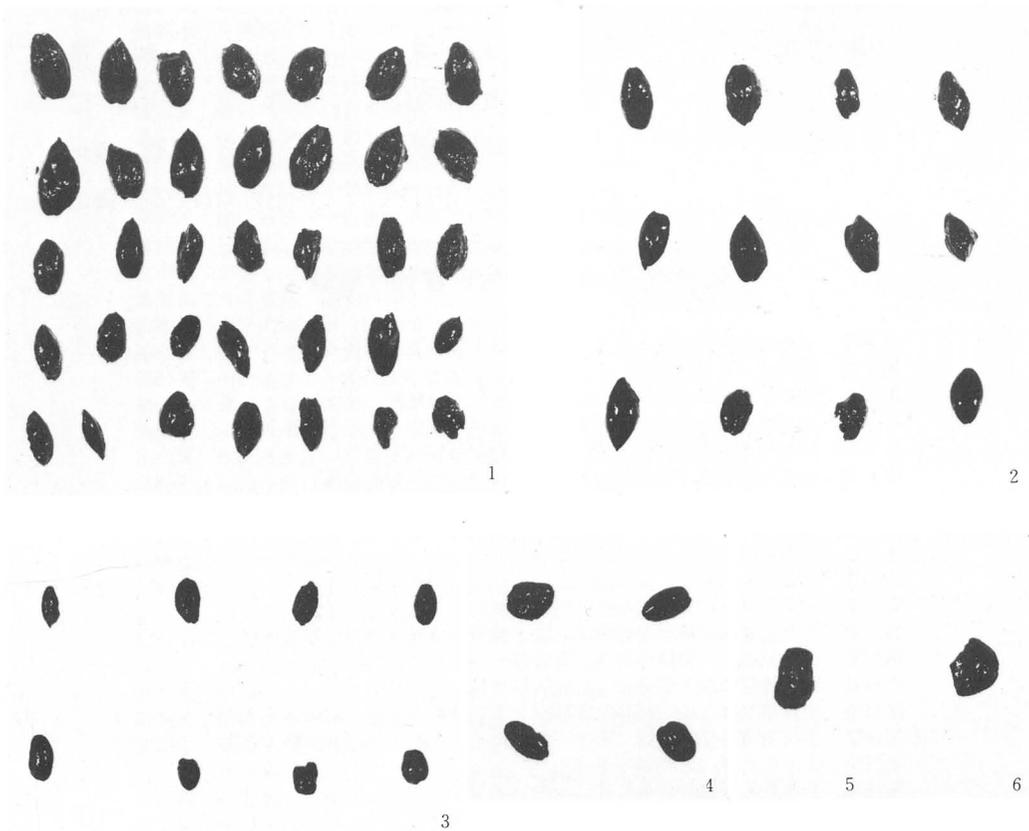
オオムギの種実はすべて炭化した皮麦であり、これが最も多い。若干は破片であるが、大部分は丸のまま出土している。これと若干のコムギ粒および玄米が混在している。さらに豆類としてリョクトウと思われる形のもの4粒とアズキと見られるもの1粒が認められた。住居跡を切る溝の堆積土中より出土したのであるから、これは遺跡内で食糧とされたものの一部がこぼれ落ちたものと推定できる。したがって、それらから当時 (古墳時代中期?)の、この遺跡内の人々の食糧の内容を推定できる。

すなわち、オオムギが数量的に最も多いところから、オオムギが主食であったと言えよう。それらは全て皮麦である。皮麦は裸麦より耐寒性が強く、現在でも東北地方以北では皮麦しか栽培されていないことから、当時も皮麦が南小泉地域で栽培されていたことは妥当性がある。皮麦は密着している皮 (穎) を除去しないと食用にならない。臼でついても当時の技術では剥皮は困難であるから、丸のまま食用にしたとは考えにくい。たぶん皮麦は炒ってから粉 (ハッタイ粉) にして食べたのではあるまいか。コムギ粒が米粒よりも多く見出されたことも注目される。コムギ粒は丸のまま煮食できるし、米と混炊もできる。コムギが出土したことから、これを製粉してパンにまで作ったかどうかは判断し難い。いずれにしてもオオムギ、コムギという畑作物がかなり多いということから、南小泉周辺は、当時かなりの面積の畑地が開拓されていたと推定できる。

豆類としては、リョクトウ状のものが4粒見出される。リョクトウは我が国には17世紀以降しか記録が見出せないが、実際の伝来は縄文時代ではないかと推定が出されている。それは福井県の鳥浜貝塚から古代のリョクトウが発見されたからである。このことから、古墳時代の南

小泉でリョクトウが栽培されていた可能性も充分考えられる。その点で重要な興味あるサンプルである。しかし、炭化種子は野生のヤブツルアズキの種子ともよく似ているので、その可能性もあり、リョクトウと断定するには、さらに検討を要する。アズキと思われる種子も1粒だけであるが見出された。アズキはこの時代にはすでに伝来して各地で栽培されていたと思われる。

南小泉地域は、現在もそうであるように、昔から湿地が多く、水田が古くから開かれてイネが栽培されていたと思われるから、玄米の炭化物が見出されることは不思議ではない。しかし、米よりもはるかに多くの畑作物(ムギ類)が栽培されていたと推定されることに興味を持たれる。皮麦は水田裏作であるが、当時は未だ裏作は行なわれていなかったと思われるので、これらの麦類は水田地帯の周囲の高い所に開かれた畑での生産物と見るべきである。



1. オオムギ(皮麦) 3. イネ(玄米) 5. アズキ
2. コムギ 4. リョクトウ(ヤブツルアズキ?) 6. 穀破片(種不明)

職 員 録

| | | |
|---|---|---|
| 社会教育課 課 長 阿部 達 主 幹 早坂春一 文化財管理係 係 長 佐藤政美 主 事 岩沢克輔 〃 山口 宏 | 文化財調査係 係 長 佐藤 隆 主 事 田中 則和 〃 結城 慎一 教 諭 菅原 和夫 主 事 木村 浩二 〃 篠原 信彦 教 諭 小野寺和幸 〃 佐藤美智雄 主 事 佐藤 洋 〃 金森 安孝 〃 佐藤 甲二 | 主 事 吉岡恭平 〃 工藤哲司 〃 渡部弘美 教 諭 渡辺 誠 主 事 主浜光朗 〃 斎野裕彦 〃 長島栄一 〃 及川 格 教 諭 千葉 仁 〃 松本清一 派遣職員 高橋勝也 |
|---|---|---|

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 第2集 仙台城（昭和42年3月）
- 第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
- 第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
- 第9集 仙台市根岸町宗禪寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
- 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
- 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
- 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
- 第13集 南小泉遺跡一範圍確認調査報告書一（昭和53年3月）
- 第14集 栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
- 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
- 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
- 第17集 北屋敷遺跡（昭和54年3月）
- 第18集 栢江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
- 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
- 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
- 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
- 第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）
- 第23集 年報1（昭和55年3月）
- 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
- 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
- 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）

- 第28集 年報 2 (昭和56年 3月)
第29集 郡山遺跡Ⅰ—昭和55年度発掘調査概報— (昭和56年 3月)
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報 (昭和56年 3月)
第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ (昭和56年 3月)
第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第33集 山口遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年12月)
第35集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第1次調査報告 (昭和57年 3月)
第36集 北前遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書— (昭和57年 3月)
第38集 郡山遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概報— (昭和57年 3月)
第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ (昭和57年 3月)
第41集 年報 3 (昭和57年 3月)
第42集 郡山遺跡—宅地造成に伴う緊急発掘調査— (昭和57年 3月)
第43集 栗遺跡 (昭和57年 8月)
第44集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書 (昭和57年12月)
第45集 茂庭—茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書— (昭和58年 3月)
第46集 郡山遺跡Ⅲ—昭和57年度発掘調査概報— (昭和58年 3月)
第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書— (昭和58年 3月)
第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報 (昭和58年 3月)
第49集 仙台市文化財分布調査報告Ⅰ (昭和58年 3月)
第50集 岩切畑中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第51集 仙台市文化財分布地図 (昭和58年 3月)
第52集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第2次調査報告 (昭和58年 3月)
第53集 中田畑中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第54集 神明社窯跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第55集 南小泉遺跡—青葉女子学園移転新営工事地内調査報告 (昭和58年 3月)
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ (昭和58年 3月)
第57集 年報 4 (昭和58年 3月)
第58集 今泉城跡 (昭和58年 3月)
第59集 下ノ内浦遺跡 (昭和58年 3月)
第60集 南小泉遺跡—倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書— (昭和58年 3月)
第61集 山口遺跡Ⅱ—仙台市体育館建設予定地— (昭和59年 2月)
第62集 燕沢遺跡 (昭和59年 3月)
第63集 史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報 (昭和59年 3月)
第64集 郡山遺跡Ⅳ—昭和58年度発掘調査概報— (昭和59年 3月)
第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ—昭和58年度発掘調査報告書— (昭和59年 3月)
第66集 年報 5 (昭和59年 3月)
第67集 富沢水田遺跡—第1冊—泉崎前地区 (昭和59年 3月)
第68集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第3次調査報告 (昭和59年 3月)
第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ (昭和59年 3月)
第70集 戸ノ内遺跡発掘調査報告書 (昭和59年 3月)
第71集 後河原遺跡 (昭和59年 3月)
第72集 六反田遺跡Ⅱ (昭和59年 3月)
第73集 仙台市文化財分布調査報告書Ⅱ (昭和59年 3月)
第74集 郡山遺跡Ⅴ—昭和59年度発掘調査概報— (昭和60年 3月)
第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ (昭和60年 3月)
第76集 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第77集 山田上ノ台遺跡—昭和59年度発掘調査報告書— (昭和60年 3月)
第78集 中田畑中遺跡—第2次発掘調査報告書— (昭和60年 3月)
第79集 欠ノ上Ⅰ遺跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第80集 南小泉遺跡—第12次発掘調査報告書— (昭和60年 3月)
第81集 南小泉遺跡—第13次発掘調査報告書— (昭和60年 3月)
第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ (昭和60年 3月)
第83集 年報 6 (昭和60年 3月)
第84集 仙台市文化財分布調査報告書Ⅲ (昭和60年 3月)

仙台市文化財調査報告書第81集

南小泉遺跡発掘調査報告書

昭和60年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

